

---

# 煉獄恋歌

彪峰イツカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

煉獄恋歌

### 【Nコード】

N7227Z

### 【作者名】

彪峰イツカ

### 【あらすじ】

「そんなこと、たいしたことじゃないもの」七条草摩が知り合った少し風変わりな少女、雪村絵音。再会した彼らが遭遇したのは衆人環視の元に実行された自殺か、それとも――。愛憎渦巻く現代ミステリシリーズ第2作。

※オリジナル創作サイト「Never-never Land」より転載

## プロローグ

あなたと最後にデートに行った日のことを、わたしはまだしっかりと覚えている。

小さな喫茶店で、あなたはコーヒーを飲みわたしは紅茶を飲んだ。――いつだってそう。わたしたちは一度も同じものを飲んだことがない。例外はビールだけ……それでもあなたとわたしの好きな銘柄、違っていた。

あなたのコーヒーの上に白いマール模様を描かれるのをぼうつと眺めていると、

「何を考えているの？」  
って聞かれた。

それ、あなたの口癖なのかしら。一日に一回は必ず聞いていた。わたしが何も考えていなかったというと、あなたは苦笑した。――何も考えないのはそれほどおかしいこと？ いつも何かを考えているほど丈夫な心を、わたしは持っていない。

「映画はどうだった？」  
見に行った映画は当時流行っていたラブストーリーで、恋人同士が病魔によって引き裂かれるという、まあ古今東西良くある題材を扱っていた。

「主役の男の子の演技が、上手かった」  
「……映画見ている最中にそういうこと思う？」

あなたは何故か眉を顰める。  
「じゃあ、あなたは何を考えているの？」

「演技とか考えちゃうと没頭できないし。ストーリーとか心情を追ってる」

「難しいことをするのね」

わたしは微笑みただけれど、それをあなたに伝染させることはできなかった。あなたは真顔で聞き返す。

「難しいかな」

「難しい。とっても」

「どうして？」

「自分以外の人間に、そう簡単になってしまえるなんて」

「映画とか小説ってそのためのものじゃないの？」

「そうかもしれない。でも」

わたしは目を細めた。

「わたしは神様を体験するの」

「神様を？」

「そう」

目の前で繰り広げられている喜劇も悲劇も惨劇も、全ては遠い世界の話。きつと神様は、地上を眺めてこんな思いを味わっているに違いない。

——不意に、あなたは私の名前を呼んだ。

「なあに？」

「聞いてほしいことがあるんだ」

「何でも言って」

今のわたしはあなたの話を聞くモードなのだから。

わたしの笑みから目をそらし、あなたは言った。

「……別れて欲しい」

「……………」

わたしは軽く首をかしげた。

「どうして？」

「おれには君を理解できない」

わたしの唇から笑いが迸った。あなたはぎょっとしたようにわたしを見つめる。

——だって、これが笑わずにいられる？ あなたはわたしを理解しようとしていたのね。どうして、どうしてそんなこと。

「何がおかしいんだよ」

あなたの気色ばんだ顔に、さらに笑いが零れる。いつの間にか店

員もこちらを凝視していた。何て格好の悪い。それでも笑いが止まらない。

わたしはあなたに理解して欲しくなんてない。そのつもりで付き合っていたんじゃないのよ。

わたしはあなたが欲しかった。

あなたにもわたしを欲しがってもらいたかった。ただそれだけ。

理解しあおうとあなたが試みていたなんて、わたし全然知らなかった。

「そんなことで別れる必要なんてないわ」

わたしは笑いながら言う。

「理解しなくたっていいもの」

「おれは」

あなたは生真面目な表情を崩さない。

「理解できない人を心底好きにはなれない」

「あなたは自分を理解しているの？ 親も？ 友達も？ もし理解していると思っているんだとしたら、傲慢よ」

「……言い方を変えるよ」

あなたはため息をついた。

「自分を理解させようとしてくれる……そういう人。ポーズでもいいから、そうしておれを受け入れようとしてくれる。そういう」

あなたは目を伏せ、コーヒーを一口。わたしは笑い声を止めてあなたをじっと見た。

「あなたはわたしを好きになれなかった？」

「……そう」

「わたしのことがわからなくて？」

「わからせようとしてくれなくて、だ」

「……………」

わたしには彼の言っていることがわからない。

「とにかくもう……、終わりだよ」

「わたしはまだあなたが好きでも？」

「通じ合わない好意には意味なんてないだろ」

残っていたコーヒーを全て飲み干し、あなたは時計を見た。

「まだ六時だけど……家まで送ろうか？」

わたしは目の前の紅茶が彼を求めて細かく震えているのに気付いた。カップを握るわたしの指まで揺れている。

——そしてまた、彼は私の名前を呼んだ。

「どうした？」

「うるさい」

まだ少し湯気の立っていた紅茶は彼の顔面に熱いキスの雨を降らせ、わたしは叫び声をあげた彼をそのままにしてその喫茶店を出た。

どうしてうまくいかなかったのかしら。わたしはあなたが好きなのに。

あなたにはわたしが必要なかったの？

それでもわたしにはあなたが必要なの。

——だけど。

生きていることは、

必要じゃないかもしれない。

## 第一樂章 Andante

### 1

その日は七夕だった。七条草摩しちじょうそうまは後に懐かしげに思い返す。何か思い出す必要のある特別な日なのかと問われれば、彼は違うと答えるだろう。本当の記念日は別の日で、またそれは別の話。

七月七日金曜日、午後六時を少し過ぎた頃。ラッシュ時の混みあう〇駅の中央口に若い男女の集団があった。草摩もその中にいる。

「集まらないわね」

一団のまとめ役らしき女性がふう、とため息をついた。同年代なのだろうが、随分大人びて見える。露出度の高いピンクのキャミソールをまとい、きっちり施されたメイクには一分の隙もなく、したがって草摩には話しかける勇気が出ない。どこの大学だと言っていたか……草摩はうっかり聞き漏らしていた。まあどこでも構いはしないのだが。

いわゆる合コン、というものに出席するのは草摩にとって初めてのことだった。特に興味もないし、どうも自分の肌に合うとは思えない。そんな彼が何故ここにいるのかというと、友人の穴埋めのためだった。急に風邪を引いたらしいのだが、店には人数分予約をしていてキャンセル料が発生するという。たまたまその日は周囲の誰も都合がつかず、渋る草摩に友人は参加費の八割負担でいいから、と半ば強引に押し付けたのだ。結局断りきれなかった草摩は今、所在なげに佇んでいる。

「なかなか全員揃わないね」

草摩の隣りに立っていた男が呟く。H大生の鹿野純かのじゅんで、草摩の予備校時代の友人だった。草摩は軽く肩をすくめる。

「まあ、そんなもんだろ」

さらにその隣り、つまり草摩と鹿野を挟んで線対称の位置に立つ女性が口を開いた。独り言に近い小さな声だったが、草摩にははっきりと聞き取れた。

「どう考えても、私は場違いでしょ」

鹿野があわてて両手を顔の前で合わせる。

「ごめんって。直前で女の子一人抜けたから、どうしてもさ」

「合コンだなんて聞いてないわよ」

「そりゃあ言っていないからな」

「むう」

「怒るなよ雪村ゆきむら」

雪村と呼ばれた女性はきっと顔を上げた。わずかに染めているのか、ダークブラウンの髪とくっきりした目鼻立ち。化粧はしているのかしてないのか、男である草摩の目には良く分からない程度だった。意志の強そうな眼差しと口元だと思う。

確かに、彼女の様子を見ればここに集っている他の女性たちと違うのは一目瞭然だった。鹿野との会話から類推すると、彼女は鹿野の同級生らしい。草摩も入学以来合コンに明け暮れている友人を何人も知っているが、大抵お相手は女子大生だった。逆に、同級生の女性が合コンに行ったという話はあまり聞かない。その理由は、何となく理解できる。

「俺も代理なんだよ。お互いやられたね」

草摩を見て一瞬眉を顰めた彼女は、草摩と初対面かそうでないかを探ったのだろう。草摩はそれを察して自分から名乗った。

「俺は七条草摩。K大一回生」

「ソウマってどういう字を書くの？」

差し出された手のひらに一瞬面食らいながら、草摩はその白い手のひらに指で軌跡を描いた。肌には触れない。

「草はくさで、摩は護摩を焚くとかいう護摩の、摩。分かるかな」  
「分かるわ」

彼女はあっさりと頷き、次に自分の指で自分の手のひらに文字を



書き始めた。

「私は雪村<sup>かいね</sup>絵音。H大よ」

草摩は彼女の指を眼で追い、やがて声を上げた。

「これでカイネ？ 読めないな」

「でしょう？ エネって読まれたりエオンだったり」

「まあ俺の名前も大概だけどさ」

草摩は苦笑した。絵音も微笑む。

「きっと七条君の名前はすぐに覚えられると思うわ」

「珍しいから？」

「それもあるけど……」

絵音の言葉にかぶさるように、先ほどの女性が声を張り上げた。

「全員集合したんで、移動しまーす」

「……幼稚園児みたいだな、俺たち」

鹿野の言葉に、草摩と絵音は力なく頷いた。

## 2

店に入った一行は、それぞれ思い思いの席に着いた。先ほどの流れで何となく一緒にいた草摩と絵音は隣同士に座る。鹿野は別の友人の近くに座った。

「飲み会、久しぶりだな」

「私もよ」

にこりと微笑み、絵音は言葉が続ける。

「私、飲み会だと大抵介抱役になっちゃうし。あんまり騒ぐのって、性に合わないのよ」

「それ、俺もだよ」

草摩は相好を崩す。

他の誰がそう言っても心から信じられなかった。介抱役を自称しながら真っ先に潰れた者を、男であれ女であれ、彼は何度も見ている。

る。だが彼女の場合は違うと思った。

「七条君はお酒強い方？」

「パッチテストではそれなりに赤くなっただけ。あんまり強くはないと思う。そんなに飲まないけど。……雪村さんは？」

「私、まだ酔ったことないわね」

「強いんだ」

「というより」

絵音はテーブルに肘を突き、その小さな手のひらに顎を載せた。

「外じゃ酔えない。緊張してるから」

「緊張してる？ 今も？」

「多少ね」

「そうか」

何となく意味は分かった。

彼女は自分の中に殻を持っているのだろう。本当の自分はその間に仕舞われていて、アルコールをもってしてもこじ開けることはできないし、することもない。知らない人間の前で無防備な素顔は晒さない。

絵音の彫りの深い横顔には確かにどこか張り詰めたような緊張感が漲っていた。一方でそれは溢れる生気のようにもあって、草摩には心地よく感じられる。この女性への興味が湧いた。

「H大って言えば」

草摩はふと思い出す。

「高城たかぎ尚人なおとっていない？」

「いる」

「それ予備校時代の同級生なんだけど。そこの鹿野も一緒」

「え、そうなの？」

絵音は大きな瞳をさらに見開いた。

「私、高城君とも鹿野君とも仲いいのよ」

「……そうなんだ」

ちり、と嫌な感じが掠めた。一瞬この話題を出したことを後悔す

るが、だが話を盛り上げるという意味では効果的だったかもしれない。絵音は僅かに身を乗り出していた。共通の知人がいるという親近感がなせる業だろう。

「変な子よね」

絵音はくすりと笑う。草摩もつられて頬を緩めた。

「かなり変だね。というより相変わらずなのかな」

「多分ね。昔の高城君は知らないけど」

「あのまんまなんだろうなあ。最近会ってないけど」

「あの子、今合唱部に入ってるのよ」

「それ、メールで聞いた」

「すごい熱上げてて、真夜中まで部室で練習して、授業に来なかつたり」

「本末転倒だなあ」

大学生にはありがちなことだ。だが草摩はそういう学生があまり好きではない。見遣ると絵音も軽く眉を顰めていた。

「そう。そのくせ要領はいいんだから」

「うちの大学はそんなことやっても何とかなるけど、H大はそうでもないだろう？」

「うーん、何とも言えないわね」

絵音は苦笑しながら草摩を見つめる。その珈琲色の瞳に自分が映っていた。

「いくら厳しくたって、その気になれば何とでもできるもの。出席を取っても代返っていう手があるし、ノートなら誰かにコピーさせてもらえばいいし」

「うーん」

草摩の顔も彼女と良く似たしかめっ面になった。どうやらお互いそういう者たちの餌食にされる側の人種のようなのだ。気付いて笑みを交わす。

「ま、いいんだけどね」

「うん、まあね」

乾杯の為、一端会話は途切れる。だが一杯目のビールが空になった頃、草摩と絵音の会話は誰も割って入れないほどに盛り上がっていた。

3

「ただいま」

その夜草摩が帰宅したのは夜半過ぎだった。

「おかえりなさい」

奥から同居人、桐生千影きりゆうちかげの声。外科医である彼は、今日は当直ではないらしい。

「遅かったですね」

「うん。飲み会の場所が〇駅辺りだったからさ」

「オールになるのかなと思っていました」

「いや。帰ってきた」

リビングを覗くと桐生が新聞をめくっていた。まだシャツにスラックスを身につけているから、風呂はまだらしい。

「ごめん、待たせた？」

「いいえ。今日はちょっとオペが長引いたので、先ほど帰ってきたところなんです」

「そうなんだ」

桐生は草摩の母親の従姉妹の息子であり、草摩が父母を失った今では保護者のような存在である。また、草摩と同窓でもあった。十三、四ほど上の先輩ということになる。

桐生はふと顔を上げた。

「草摩君、何か機嫌良くないですか？」

「え？ いや別に」

「顔がにやけてますよ」

「嘘」

草摩はふと頬を引き締める。

「ちよっと飲んでるからじゃないかな？」

「……………」

桐生の端正な顔から放たれる猜疑の眼差しに、草摩は何となく面映くなって瞬きを繰り返した。

「いい女の子でもいましたか？」

「そんなじゃないよ」

一瞬、どっと汗が流れる。

「いい友達になれそうな子なら、いた」

「『友達』？」

「うん。ま、女の子なんだけど」

「『友達』……『友達から始める』……『お付き合い』……」

「何をぶつくさ言ってるんだよ」

新聞の紙面を睨みながら呟き始めた桐生の背中を軽く叩き、草摩は鞆を自室に放り込んだ。

「風呂洗い、まだだろ？ やってくるわ」

「あ、お願いします」

草摩が机の上に投げ出した携帯電話がメールの着信を告げる。草摩は既に浴室に行つて音に気付いていないようだ。

「……………」

桐生はそつとサブディスプレイを覗き込んだ。勿論中身を見るような真似はしない。草摩のプライヴァシーは尊重されるべきだ。だが好奇心というものはそれと関係なく否定しようもなく存在している。

「……『雪村』、えっと」

ご多分に漏れず桐生も彼女の名前は読めなかったらしい。

「エネ、じゃないだろうし、エオン？ まさか。ええっと……」

「カイネ」

戻ってきた草摩は桐生の眼前から携帯電話を掬い上げた。

「カイネ？」

「そ。雪村絵音」

「変わったお名前ですね」

画面を開いてメールを読む草摩の横顔は明らかに上機嫌で、桐生は思わず苦笑する。

だが、ほんの一ヶ月もしないうちに彼女と桐生が直接出会うことになるうとは――そして共に同じ事件に巻き込まれることになるうとは、この時はまだ誰も想像だにしなかったのだった。

#### 4

七夕から二週間が過ぎた頃、草摩は大学に入って初めて高城尚人と会った。メールで時折連絡を取ってはいたのだが、こうして顔をあわせるのは四ヶ月ぶりのことである。最後に会ったのは一騎の葬式の時だったか――短い付き合いにも関わらず、高城は駆けつけてくれた。そのことに、草摩は心から感謝している。

場所はK町。居酒屋や近付くのが躊躇われるような雰囲気の間でが華々しく夜の街並みを彩っているが、彼らが入ったのはそれなりに名の知れたチェーン店で、店舗そのものは新装開店したばかりということだった。内装も新しく、清潔感がある。

一杯目のドリンクを頼み店員が去ったのを眼で追ってから、尚人は草摩に視線を移した。

「そういえばさ、絵音さんに会ったんだってね」

「カイネさん？」

「ああ、雪村さんのこと」

そんなことは分かってる、と草摩は内心で呟いた。――俺が聞き取ったのは、何でお前がそうなれなれしい呼び方をしているんだって話。

尚人の少し長めの髪はつややかに明るくカラーリングされていて、

それがどこか日本人離れた彫りの深い顔立ちにとっても良くマッチしていた。

「あの日の夜、メールが着てさ」

「何て？」

「『七条君っていう子と知り合いになった。あの子面白くていい子だった』ってさ」

「俺、面白いか？」

草摩が首を捻ると、尚人はかすかに笑った。

「面白いかどうかはともかく、ちよつと変わってるよな」

「そう？ お前には言われたくないような気もするんだが」

店員が尚人の前に生ビールを、草摩の前にファジーネーブルを置く。

「草摩はお酒弱いんだっけ」

「うん、まあ」

「じゃあ仕方ないな」

何か仕方ないのか分からないが、尚人はそう言うとき軽くグラスを持ち上げた。

「乾杯」

鈍く、グラスが鳴った。

## 5

その日の草摩は随分注意深かったと言えるだろう。何しろ尚人と来たらその顔立ちに似合わず噂好きな世話焼きで、特に他人の恋路に首を突っ込むのが大好きなのである。

草摩の中で絵音はまだ一友人であり、特別な感情は意識されていない。それでも、万が一草摩が彼女に興味や、わずかにでも好意でも持っていることを知られてしまったら、かなり鬱陶しいことになるのは間違いない。それでいて大学での絵音の様子に興味があった

草摩は、それとなく尚人から聞き出すことに成功していた。

「口ではきついこと言うけど、結構面倒見がいいんだよね。優しいよ」

「そうなのか？」

「うん。僕もあんまり授業に出ないものだから心配されちゃって。ノートをコピーさせてくれたりプリントをもらっておいでくれたり……色々世話になってる」

「へえ」

「変なところでお人好しなんだよね。あれは損をする」

「どうして」

「外面の強さと、内面がミスマッチっぱいからさ」

「……………」

その分析には少し驚かされた。絵音は、芯まで強い女性なのだと思う。あの飲み会の日も、凜とした眼差しは常に少しも揺らぐず、自分というものを強く確立している人なのだと感じさせるものだった。

だが、同時に自分の気遣いを相手に悟らせまいとしているような様子も窺えて、敏感な草摩はそれに何となく勘付いたが、気がつかない者も多いだろう。尚人も、気が付いた側の人間だということだろうか。

草摩の内心の動揺が顔に出たのか、尚人は少し微笑んだ。

「まあ、多少親しくしていれば分かってくるよ」

「ふうん」

そろそろ潮時だろう。草摩はそう判断して、話題を他の方面に振った。共通の友人の近況やお互いの近況について話を広げているうち、やがて尚人は二枚のチケットを取り出した。

「草摩、八月八日って空いてる？」

草摩は脳裏にカレンダーを思い浮かべた。

「うん、多分な」

「もし良かったら、これ来て欲しいんだけど」



草摩は差し出されたチケットに目を落とした。

「K外大の講堂で、K大とH大合唱部合同音楽祭っていうのをやるんだ」

「そんながあるのか」

「そうそう、その練習が今忙しくて」

「授業行けよ」

「うん、まあ……」

「それでそのチケットなのか？」

「勿論」

「わかった。……チケット代、今払えばいいのか？」

「ありがとう。半額でいいよ」

「本当に？」

草摩は驚いて眼を上げた。尚人は頷く。

「これ配るのノルマみたいなものだし、こちらは所詮アマだからね」

「じゃあ二枚で千円？」

「うん。ありがと」

尚人は草摩の手にチケットを渡し、やがてふっと草摩の顔を見つめた。

「……どうした？」

聞き返すと尚人は苦笑して首を横に振る。

「いや。絵音さんから聞いたんだけどね」

「うん」

「K大の方の合唱部に友人がいて、厄介事に巻き込まれているんだってさ」

「へえ……」

「詳しくは教えてくれなかったけど。心配そうだったよ」

——もしかしたら、絵音も来るのだろうか。

草摩はチケットを見つめる。

あの日彼女と交わした会話は楽しかった。もう少し色々話してみたい。

尚人は空になった四杯目のアルコールをテーブルの上に置いた。

「お前、確かクラシック好きだろう？」

「うん、まあ」

どうやら亡くなった母が好きだったらしい。彼女の集めた古いレコード、CD、それらのどれ一つ捨てずに一騎がとっておいたものを、今度は桐生がそのまま引き取ってくれた。

「楽しんでもらえるとと思うな」

尚人の横顔には充実した気概が満ちていて、それでも草摩は釘を刺す。

「楽しいのはいいけど、お前、あんまり人様に迷惑かけんなよ」

「はいはい」

——こいつ、絶対分かってねえ。さわやかに微笑む尚人の顔を見ながら、草摩はやれやれとため息をつくのだった。

## 6

七月末日。雪村絵音は受話器から流れ込んでくる声に耳を傾けていた。

声の主は吉原奈津子<sup>よしはらなつこ</sup>。高校時代に通っていた塾で知り合った友人で、今はK大医学部に在籍している。大学に入学してからもしばしばメールで連絡を取ってはいいたが、電話がかかってくるのは珍しい。奈津子の声はどこか沈んでいて、歯切れも悪かった。絵音は軽く眉を顰める。

『絵音ちゃんはさ』

奈津子は尋ねる。

『彼氏いないの？』

「いないけど……」

絵音は言うと同時に思い出した。奈津子は確か、ひと月ほど前に彼氏ができたと言っていた。確か同じ合唱部の先輩だと聞いたよう

な覚えがあるが……。

『じゃあ、気になる人とか』

「うーん、今のところはいないなあ」

絵音は苦笑した。

弟がいるからかどうかは知らないが、彼女は異性と友人になるのが得意だった。時には同性の友人より心地よく、距離感が上手く掴める。それが幸いしたのか災いしたのか、絵音自身あまり異性をそれと意識することがなく、これまで特に誰とも付き合ったことはなかった。

実は大学に入ってから二度ほど付き合ってた欲しいと言われたことはあるのだが、何となく気が乗らず、色良い返事は返さなかった。そういうところで妥協するつもりはない。

「それより、なっちゃんはどうなの？ 彼氏さんとうまくいつてる？」

『うん……』

あまりうまくいつてはいないのだな、と絵音は悟った。

「私で良ければ聞くけど？」

絵音は自分が相談されやすいキャラクタであることを自覚している。奈津子はしばらく逡巡した後、

『八月八日、空いてる？』

「八日？」

絵音はスケジュールにさっと目を走らせ、

「特に何も予定はないわね」

『合唱祭に来る気ない？ 場所は』

「あ」

絵音は声を上げた。

「そういえばそのチケット高城君に押し付けられたわ」

『高城君？』

「H大の合唱部の子よ。行くかどうか分からないって言うてるのに、ノルマ達成のために協力しろって……無理やり売りつけられたの」

『仲良さそうじゃない』

「……誤解。そんなんじゃないから」

絵音は肩をすくめた。

確かに尚人と彼女は仲が良く見えるだろう。実際、友人という意味ではかなり馬の合う方だと思う。それでも奈津子の言う意味の「仲が良い」では決してあり得ない。

尚人はあれで他人に対する洞察が鋭い男だ。それは絵音にも共通している。だが、彼は自分の観察眼に自信を持っている。それは絵音との決定的な違いだった。——人は決して他人の全てを理解することはできない。絵音はそう思っている。理解したふりをするのは簡単だ。だが、それは時に相手を傷つけ、そしてさらには自分をも傷付ける——。

「その合唱祭、行こうか？」

『うん。良かったらその後一緒に夕飯でもどうかなって』

「いいわね」

絵音は微笑んだ。

「そのときに話してくれる？」

『……ええ』

奈津子は答える。

『そのとき……きつと』

## 7

八月八日、K外大講堂前。草摩の側には桐生の姿があった。

「せっかくの休みなんだし、家にいれば良かったのに」

「でも車で来られて良かったでしょう？」

桐生はそう言って微笑む。

「それにチケットは二枚あったんですから、無駄にするのも」

「まあ、それはそうだけど……」

「誰か、誘いたい人でもいましたか？」

「いまっせん」

力いっぱい否定する。

「なんだ……」

桐生はあからさまに肩を落とした。

「がっかりすんなよ」

「だって……ねえ」

「何がだって、だ」

「若いのに」

「お前は？」

「え？」

桐生は一瞬ぽかんとした。珍しく無防備なその表情に戸惑いながらも、草摩は続けて言う。

「お前の大学生時代ってどうだったの？ 俺聴いたことない」

「僕ですか？ 僕は——……」

桐生は草摩から視線を外した。遠い記憶を遡るように眼が細められる。

「僕は……」

「あれ？」

どこことなく聞き覚えのある声が背後に聞こえた。

「七条君？」

「え？ あ」

草摩は声の主を発見して声を上げる。

「雪村さん？」

「え？」

隣りで桐生が反応する。草摩は慌てた。

「何でお前が覚えてるんだよ」

「いやまあ」

桐生が視線を向けた先にいる一人の若い女性。——この子が雪村絵音か。桐生は興味深げに観察した。草摩と同じ年だというが、ど

こか大人びているように見える。すらりとした身長のせいだろうか。真っ直ぐに相手を見据える大きな瞳が、草摩から桐生へと向けられた。首の角度が右に二十度ほど曲がる。

「七条君のお兄さん？」

「いやいやいや」

草摩は何故か妙に力を入れて否定した。

「それは違う。全然違うから」

「はじめまして」

桐生は微笑を浮かべている。穏やかで人当たりのいい、もしこれがセールスマンなら誰もがふっと商品を購入してしまいそうな、そんな笑顔である。

「桐生千影といいます。草摩君の遠縁の者で、現在は保護者です」

「こちらこそ、はじめまして」

絵音はぺこりと頭を下げた。

「雪村絵音です」

「雪村さん」

七条はふと疑問に思って問いかけた。

「何でここにいるの？」

ここは講堂内のロビーフロアだ。

「え？」

絵音は黒のキャミソールの上に白いサマーカーディガンを羽織っている。指先の色はほとんどそのカーディガンと同化していた。

「ホールが寒かったから出てきたの。まだ開演には間があるし……」

「あ、雪村さんも合唱祭見に来たんだ」

「七条君も？」

絵音は小首を傾げて尋ねた。

「ああ。高城にチケット二枚渡されて——ってそうだ」

草摩はふと思いついた。

「さっきそこに自販機あったからさ、何かあたたかいもの買ってくるよ」

「え、じゃあ私も」

「僕が行きましょう」

桐生が割って入った。

「二人とも、ここにいてくださいね」

有無を言わせぬ笑み。

「……はい」

二人は大人しく頷いた。

8

桐生は柔らかなカーペットの上を歩きながら、独り思考していた。自分の名乗りを聞いたとき、絵音は少しだけ反応した。——名前の違う遠縁の親戚が今保護者をしている。その意味を考えたはずだ。見開かれた眼がやがて納得の色に染まり、そして温かな理解が彼女の表情に流れ込んだ。七条という名から例の一件を連想するのはそう難しくはないはず。

草摩の父親が殉職し、叔父が謎の自殺を遂げ、それら全てに関わっていたと思われる新興宗教教団の教祖もまた自死した——。

一時はマスコミを賑わせた騒動だったから、絵音もきっと知っているだろう。まあ、一人遺された息子の名前までは知らなかったかもしれないが。

「あの子、何も言わなかった……」

自販機の前で一人ごちる。それは草摩に興味がないせいなのか、それとも興味があるゆえなのか。興味が無いのだとするならば、桐生がこれ以上考える必要はない。だが興味があるがゆえに何も聞かなかったのだとすれば——。

「草摩君が気に入るのもわかる気がする」

桐生はくすりと笑った。自販機に五百円玉を入れ、商品を眺める。草摩はホットティがいいと言っていた。彼の好みは甘ったるいほ

どのロイヤルミルクティだ。ストレート派の桐生には飲めた代物ではない。恐縮している絵音からも無理やり聞き出したところ、彼女はブラックコーヒーが好きなのだと言った。――やっぱり、ちょっと大人っぽい子なのかもしれない。

桐生は紙コップに中身が注ぎ込まれるのを待つ。

自分は何にしよう。そう思ったところではたと気がついた。三つの紙コップをどう持てばいいのだ。手は二本しかない。

「うーん……」

唸りながら視線を動かす。ふと一点で眼が留まった。楽屋裏に通じる、細い通路。その隅から話し声が聞こえていた。

「だから……いい加減に……」

「あなたが何を言っているのかわからないわ」  
低い男の声と交互に聞こえる澄んだ女の声。

「わたしが何を言ったって言うの？」

「なつ……に……やめろって……」

――痴話喧嘩かな？ 肩をすくめたところで、背後から声が掛けられる。

「すみません、やっぱり持てませんでしたよね」

「ああ」

振り向いて、微笑む。駆け寄ってきたらしい絵音が、軽く息を弾ませていた。草摩はその後ろから気が乗らないように、駆け足で追いついてくる。

「どうもすみません」

「お前なら、何とか持ってきてそうな気がしたんだけどなあ」

「無茶よ」

絵音が草摩をたしなめる。――まるで姉が弟に言って聞かせているようだった。

「助かりました。ありがとうございます、絵音さん」

「あ。名前で呼んでる」

草摩から厳しいチェックが入るが、桐生はしれっと受け流した。



「いけませんか？」

「いや、雪村さんがいいんなら……」

「私は構いませんよ？」

「そ、そう……」

「さて、そろそろ開演時間ですね」

桐生は自分用に買ったカフェオレを手にして提案した。

「ホールに入りましょうか」

「そうですね」

草摩と絵音は連れだって歩きながら会話を弾ませている。——こんなことなら僕は来るんじゃないかな。桐生は苦笑を浮かべつつ、ふと先ほど声がしていた通路を見た。

「……………」

佇む人影と、目が合う。長い黒髪の女。絵音より少し年上くらいに見える。白いブラウスと黒の長いスカートを身に着けているから、きっと出演者なのだろう。だが、出演者がこんなところで何をしているのだろうか……。

——ふ、

と人影は微笑み、桐生の視界から消えた。なんとなく、嫌な笑みだな、と桐生は思った。

## 9

照明を落としたホールの中、合唱の声だけが空気を震わせている。開演まではひそひそと話していた草摩と絵音も、今はただ黙って聞き入っているようだ。

桐生は連日の仕事疲れのせいか、うたたねのような心地よさに身を任せていた。このままでは寝入ってしまうかもしれない……。

「テナー、あんまり上手くないな」

草摩が不意に桐生に話しかけた。

「あ、ええ……そうですかね」

虚を衝かれた桐生は慌てて頷く。

「どうしたんだよ」

草摩に怪訝そうに見つめられ、彼は笑った。

「いやあ。僕の存在なんて忘れられているかと思ってました」

「なんで」

「せっかくの機会ですし」

桐生は声を低めた。

「ゲッツ」

「古！」

即座に切り返す草摩。

「そもそもそういうんじゃないし」

「でもちよつといいなって思ってるでしょう？」

「だから、『友達』だって……」

「あの子に彼氏ができたら、そうも言ってられなくなりますよ？」

異性の友人よりは彼氏さんを優先するに決まっていますからねえ」

「う……」

草摩が黙り込む。どうしたのかと不思議そうに見つめてくる絵音には、何でもないと言ったと誤魔化したようだ。その微笑ましい様に、桐生はくすりと微笑む。

——そのとき、不意に伴奏が途切れた。遅れて歌も止まる。観客たちの視線が何事かと舞台に集まった。

「百合子ゆりこ!!!」

ピアノを弾いていた女性が走った。ざわめく舞台上。

「誰か倒れたのか？」

草摩の声に、桐生が腰を浮かせる。

「ちよつと見てきましようか」

「あ……うん」

「え？ 桐生さんって……」

「ああ、あいつ医者なんだ。俺の先輩にあたる」

「あ、そうだったの」

彼らのやりとりを背後に、桐生は壇上へと身軽に上がった。

「僕は医者ですが、何かお手伝いできることは？」

「彼女が……！」

人波が割れ、床に倒れ伏した女性の姿が見えた。

「急に倒れて」

「……………」

桐生は眉を顰めて彼女を抱き起こす。長い黒髪がだらりと床に垂れた。彼女はひどく汗をかいて、苦しげに呼吸している。

「な……なんだか」

舌をもつれさせながら訴える。

「めまい……口がぴりぴり、して……」

「救急車！」

桐生は叫ぶ。何人かが走り出した。

「失礼」

桐生は彼女の口腔に指を突っ込み、嘔吐させる。大して内容物はないのか、透明な胃液が飛び散っただけだった。——何かの中毒かもしれない、そう思っただけの処置だったが、とっさのことで具体的な毒物名は思い浮かばなかった。

「は、はあ、はあ……」

女性は粗い呼吸を繰り返している。

桐生がその顔に見覚えがあることに気付いたのは、彼女に付き添って救急車に乗り込んだ後のことだった。

——あの時、ロビーの廊下で桐生の胸をざわめかせた笑顔。今はただ、ぐったりと蒼白だった。

## 10

警察、と叫んだ桐生の声が響いた後、会場内は騒然とした。草摩

は不意に立ち上がる。

「七条君？」

絵音の声を手で制して、

「ホールの出入り口を閉めて！ 警察の到着まで誰も出て行っちゃ駄目だ！」

声を張り上げる。騒ぎを聞きつけたのか、現れた係員が慌てて扉を閉めた。

「ど、ということだよ」

同じくらいの年代の男が、草摩に詰め寄る。

「今、この場にいた医者が、倒れた人の様子を見に行きました」

草摩は落ち着き払って答える。

「その彼が警察を、と叫んだ。単なる目眩や貧血じゃないってことだ」

「それはそうだろうけど、でも」

「この中に事件関係者がいるかもしれない以上、ここにいて警察の到着を待つべきでしょう？」

「犯人が、中に?!」

「犯人とは言っていないけど……」

日常にいきなり出くわした事態に動転しているのだろう、男の友人らも集まって草摩に尋ね始めた。

「なあ、どういうことなんだよ」

「いつ帰れる？ これ、もう続けられないよな？」

「えっと……」

「事故かなんかだろ？ まさか殺人なんて」

「いや、まだ死んでるかどうかなんて知らないし……」

草摩が辟易していると、

「いい加減にしたらどうですか！」

隣で勢い良く絵音が立ち上がった。

「……へ？」

間拔けな顔をして振り向く草摩に構わず、彼女はまくしたてる。

「大体、まだ誰にもどういう状態かは分からないんでしょう？ 倒れたのだって、事故で何かあったのか故意に何かされたのかもわからない。ただ、医者判断で警察が呼ばれたんです。だったらその到着くらい大人しく待てないんですか。そもそも故意犯だって犯人がここにいますかどうかなんて、ただの観客である彼に分かるわけないし、情報量は貴方たちと全く同じなんだから、ちゃんと自分の頭を使ってください」

ここで一息。

「もし事件性があったとしたら、私たちは舞台上で起きたことを見ていた証人でもあるわけで、無責任にほいほいと帰れる訳がないですよ。それくらいのことには素人にだってわかるでしょう。だったら、ちょっとは協力したらどうですか」

「きよ、協力っていったって何を」

「この場合」

絵音はぴしゃりと告げた。

「黙って待っているのが協力だと思います。皆がパニックにならないように周りの人を落ち着かせてあげるとか……それくらいのこと自分で考え付くでしょう。子供じゃないんだから！」

「……………」

草摩がぼかんとしているのを見て、絵音は慌てたように表情を変えた。高速で回転していた口がやんわりとした笑みに代わる。

「でしゃばってごめんなさい。私も不安なものだから、つい」

「……あ、ああ」

「まあ、そろそろ警察も来るよな」

草摩の前にたむろしていた男たちは呆気に取られた様子で自席の方へと引き上げていった。

「あー。雪村さん？」

「何？」

答えた後で絵音は表情を曇らせた。

「ちよっと言い過ぎたわよね……」

「いや。何ていうか」

草摩は軽く頭を掻きながら、

「口、良く回るなあ」

「……良く言われるわ」

「あの」

絵音は振り向いた。白のブラウスに長い黒いスカートをはいた、黒髪の長い女性が立っている。年は絵音と同じくらいか、少し上だろう。一瞬出演者かと思ったが、ここにいる以上、そんなはずはない。

「えっと……何か……？」

女性はどこか不安げな表情で尋ねる。

「今、誰が倒れたのか……分かりますか？」

「いえ、それはちょっと」

「そうですか……」

草摩が一步踏み出した。

「もし気になるようでしたら、舞台のほうへ行かれてみては？」

「え、……ええ。でも、ちょっと……内緒で見に来てしまったので」

大人しそうなその女性は、物静かに微笑んだ。

「多分大丈夫だと思います。ありがとうございます」

「いえいえ」

——どこかで見たことがあるような……。草摩はぼんやりと見送る。

「美人だったわね」

絵音の言葉に不意に我に返った。

「あ、そうだった？」

「うん」

「あの人、見覚えがあるんだよな……」

草摩は呟く。

「誰だっけ……？」

K府警管轄下のU警察署に知らせが入ったのは、午後二時過ぎだった。眠気覚ましにコーヒーを飲んでいた署長、伊吹は報告を聞いて目を覚ました。警部から警視に昇進したのは良かったものの、どうも一線から遠ざかるばかりでいけない。

伊吹はいわゆる準キャリアである。準キャリアとは警察庁が毎年十名ほど採用する国家公務員二種試験合格者で、彼らははまず巡査部長の地位につく。ノンキャリアと呼ばれる都道府県警察官採用者は昇進ごとに試験を受けなければならないのだが、準キャリアは年功序列に昇進する。とはいえ警視以上の昇任は全て選考で行われるから、伊吹が三十三で警視になったのは平均と比べれば早い方だった。

伊吹は準キャリアでありながらノンキャリアに気質が近いらしく、デスクワークよりも一線で捜査する方が性に合っている。ここ最近はそのような機会もなく、勿論犯罪はないに越したことはないのだが、年甲斐もなくうずうずしていた。

一一〇の第一報では、K外大で不審な急病人とのことだった。それから三十分。病院からの知らせを総合して、伊吹は眉を顰めた。

被害者は<sup>さいえき</sup>冴木百合子、K大医学部三回生。年齢は二十一歳。

合唱部のコンサートの舞台が始まって、三十分後に倒れた。唾液分泌が激しく飲み込みきれないほどで、嘔吐と強い運動神経の興奮が続き、瞳孔が散大している。医者の診断では何らかの中毒ではないか、とのことだった。症状はトリカブト中毒と類似しているという。

部下の松林巡査部長が、困惑の表情で言う。

「トリカブトって、確か治療法がないんですよね」

「そうなのか？」

「ええ。解毒剤がないんだそうです。しかも致死量は、根っこならほんのわずか」

伊吹は思い出す。

「そういえば昔トリカブト殺人事件なんていうのがあったな」

昭和六十一年、Kという男の妻が旅行中に急死した。

三番目の妻であった彼女には、二億円近い保険金が掛けられていたが、保険会社は保険金の支払いを拒否した。不審だったのは健康だった彼女が急死したという点だけではなく、実はKの一人目の妻も二人目の妻も、それぞれ急死していたことだった。

その後、平成三年になってKは別件で逮捕された。とはいえ、当局の目的は保険金殺人であり、再度検死医が検査を行った結果、Kの妻の血液からはトリカブトとフグの毒が検出された。さらに取調べで、Kがトリカブトやフグを大量に購入していたことなどが判明。Kはアリバイを主張したが、平成十二年二月に最高裁はK被告の上告を棄却、無期懲役が確定した。

「その刑が確定したの、俺が警察に入った年なんですよねー」

「……お前若いなあ」

思わずしみじみと呟いてから、伊吹は思考を元に戻す。

「しかし、何だってトリカブトなんだ。しかも舞台の上で」

「効くまで時間がかかるんじゃないんですかね」

「いや、あれは速効性のはずだ」

伊吹が呟く。

「例のトリカブト殺人事件ではそれが争点だったんだからな」

Kが主張したアリバイとは、妻が死亡した数時間前に彼は単身で東京に向かっていたというものだった。トリカブトは速効性があるため、数時間後に急死することはありえないというのである。



「結局フグ毒を合わせることで時間操作が可能になったんだとか、そういう話だったと思うがな」

「フグは遅効性なんですか？」

「多分そうなんだろうな」

伊吹は頷きながら報告に目を落とし、ある一点で視線を止めた。  
救急車に同乗していた医師。K大病院外科勤務医、桐生千影。

## 12

警察が到着し、一気にホールの空気は慌ただしいものになった。  
舞台の上にいる者たちは楽屋に帰るわけにもいかず、座り込んで警察の質問に答えている。観客たちはどちらかというと手持ち無沙汰で、自席に着いたまま周りの者とぼそぼそ会話をしていた。

「で、思い出せた？」

草摩は絵音の問いに首をひねった。さっき声を掛けてきた女性のことである。

「それが、まだ……学校で見たような気もするし……先輩かなあ……」

辺りを見回してみても見当たらない。一体どこに行ってしまったのだろうか。

「倒れた人……大丈夫かしら」

「さあ」

草摩は眉を顰める。

「分かんないな。事故なのか故意なのか、原因は何なのか……」

「ようは何も分からないってことよね」

「情報がなさ過ぎるからね」

草摩は背もたれから体を起こして軽く伸びをした。

「しかし、とんでもないところに出くわしたよなあ」

絵音は自分の髪のを弄りながら呟く。

「こんなんじゃない、なっちゃんと夕飯一緒って訳にもいかないわね」  
「え？」

「ごめん。独り言よ」

気になりつつも口をつぐんだとき、

「草摩君？」

聞き覚えのある声が背後からして、草摩は立ち上がった。目に入った人影に驚きの声上がる。

「い、伊吹さん？」

「やはりな。桐生君の名前があったから君もいるんじゃないかと」  
トレンチコートを着こなすいかにも刑事風な男に、絵音は驚いて草摩と見比べた。

「知り合い？」

「親父のことでお世話になったんだ」

「別に世話なんぞ……」

「そういえば」

草摩は居住まいを正して頭を下げた。

「昇進おめでとうございます」

「いや」

伊吹は苦笑した。

「どちらかというとN県警にあのまま置いておきたくなかったんだろう。ていのいい厄介払いさ」

「で」

草摩は表情を改める。

「倒れた方の様子はどうなんですか？」

「……分からない」

「原因は？」

「今すぐここで言う訳にはいかない。捜査してみないことには」  
「では一つだけ」

草摩はゆっくりと尋ねた。

「警察の見立てでは故意犯ですか。事故ですか」

「……………」

伊吹は唾を飲んだ。

「……事故という可能性もなくはない。だが」

囁くように呟く。

「小さいだろうね」

「……………」

言葉をなくす二人の目の前で、伊吹の携帯が着信を告げる。

「私だ」

それは病院に詰めていた捜査員からの電話だった。声音でいい知らせではないと直感する。

『たった今、冴木百合子が死亡しました』

「……分かった。ありがとう」

伊吹は手短に言って電話を切る。

彼の表情をじっと見つめて何かを探ろうとしているかのような草摩と絵音に、伊吹は簡単に告げた。

「被害者、死亡だ」

## 第二楽章 Moderato

1

観客席にいた者たちは、氏名や連絡先を告げることで帰っても良いことになった。冴木百合子が倒れてから三時間後のことであり、それはコンサートが終わる予定時刻から一時間以上も遅れていた。桐生はまだ帰ってくる様子はない。病院にいとすれば、携帯でも連絡は取れないだろう。

草摩は再び辺りを見回したが、先ほどの髪の長い女性はどこにも見当たらなかった。もう帰ったのだろうか。

「どうする？」

隣りで眉根を寄せている絵音に声を掛けると、彼女ははっと顔を上げた。

「どうって？」

「いや。もう帰っていいんだろ？」

「あ、うん……そうね……でも……」

長い睫毛に隠れて瞳の色は見えない。

「部の関係者だともっと長くかかるのかな」

「多分ね」

舞台の上に視線を送り、草摩は頷く。捜査員が歩き回る中に伊吹の姿もあった。実は、冴木百合子が命を落としたことは彼らしか知らない。いや、先ほど館内放送で冴木百合子の肉親がいなかどうか探していたから、もしいたならばその人物も知っているだろう。

「今はみんな楽屋にいるのよね」

「ああ」

「ちよっと行って来る」

「え？」

驚く草摩の目の前で絵音は勢い良く立ち上がる。

「気になることがあるの。先に帰っていてくれていいから」

「いやそういうわけにも」

彼女は不意ににっこりと微笑んだ。何かのスイッチが切り替わったのかもしれない。いわゆる開き直りだろうか、と草摩は思った。

「今日はありがとう。じゃあね」

「いや、あの雪村さん」

くるりと身を翻した彼女の腕を軽く掴む。

「楽屋の入り口なんて、普通に捜査員が張ってると思うよ」

「……………」

絵音はうつすらとルージュの塗られた唇に指先を当てた。齒の間からかすかに舌先が覗くその表情は、ひどく子供っぽい。

「それもそうね」

「……………」

草摩は一瞬の逡巡の後決断し、口を開いた。

「伊吹さんに頼んでみようか」

「さっきの刑事さん？」

「正確には警視だけど……………」

「頼めるの??」

絵音は草摩の腕を逆に掴んだ。そのまま軽く揺する。

「うんと、多分……。無理だったらごめん」

草摩は脳内でめまぐるしく計算した。春にN県で起きたあの事件の真相を知る自分は、ある意味警察に対しては強い立場である。彼らは結果的に身内をかばうような決断を下したのだから。

「こちらこそ無理言ってごめんなさい。でも、お願いするわ」

「うん」

草摩と絵音は足早に舞台袖へと移動を開始した。

K府立医科大学附属病院。

桐生は捜査員に混じって、急遽用意された部屋にいた。元々は研修医が泊り込むためにあるもののようで、部屋の隅には簡易ベッドが二台置かれている。

楽屋に置かれていた被害者の鞆や、舞台にいたときに身につけていた衣服、所持品などがテーブルの上に並べられていて、桐生はそれらを静かに眺め渡していたが、やがて一点で眼を留めた。

「あの、すみません」

「はい？」

振り向いたのは巡査部長で、確か松林とか名乗っていたはずだ。

それとも松田だっただろうか……それとも松本？

桐生は人の顔を憶えるのは得意だが名前を記憶するのは不得意である。一度会ったことのある人物の顔はほとんど忘れることなどないし、いつどこで会ったのかも、交わした会話すら記憶の引き出しから取り出せる。だが、名前だけは別なのだ。

顔と、名前。

人の脳には顔に特に反応する神経細胞があることが明らかにされている。人にとって顔の識別はそれだけ重要だということなのだろうか。事故などで脳に傷害を負った人の中にまれに顔の識別がまったくできなくなる人がいて、しかしそういう人も大抵声の聞き分けは問題なくできる。相貌失認は、両側または右側の後頭葉・側頭葉の損傷によるケースが大部分で、特に重視されているのは紡錘状回と呼ばれる部位だ。ここに、例の顔を見分ける神経細胞が存在しているのである。相貌失認でない人間にとっては、人の顔を見分けるのは簡単なことだ。相手が同じ民族・人種に属している場合、さらに容易くなる。だが、動物の顔の見分けとなると難しい。だが、サルにとってはサルの顔の見分けは恐らく簡単なのだろう。同種個体の識別というのはとても重要なことで、生物はそれを容貌によって行ってきた。脳もそのように対応し進化してきたのだろう。

一方、名前をつけるという行動は人特有のものである。犬などは

名詞という概念がないという。名前を呼ばれてやってくるのは、その名前という音声を「来い」という意味の動詞だと理解しているからだそうだ。

「名付ける」ということは抽象的かつ流動的な事象の一部分を切り取り保存するということ、それは写真を撮る行為に似ている。写真に写っていない部分が常に存在しているし、写っている部分でさえ時が移ろえば変化が現れる。

——だから、他人の顔が覚えられても名前が覚えられないのは仕方ないのだ。

そこまで考えて桐生は小さく嘖き出した。随分と長い言い訳である。

「どうかしましたか？」

歩み寄る松林——多分これであっていたと思う——を見て、彼は表情を引き締めた。

「これ」

捜査員と違って手袋をしていないため、彼は品々に手を触れることができない。桐生はそのすらりとした指先でテーブルの一角を指し示した。

「花、ですね」

松林が頷く。茎を僅かに残して折り取られたらしい花は紫色をしている。

「これ。トリカブトの花では？」

「え？」

松林が聞き返した。桐生は周りの捜査員の一人に手袋を借り、花を手にとった。

「ほら、この帽子状の……五枚ある、花卉に見えるものがありますよね」

「え、ええ」

「これは実はガクです。花びらは」

桐生は二本の突出した突起を指先でつついた。

「こちら。蜜腺になっているのですが、本当の意味での花びらはこれなんですよ」

「お詳しいですね」

松林はじつと桐生を見つめた。実は、先ほど伊吹から電話があった桐生について話を聞いていたのである。――頭は切れるが何を考えているか今一つ分からない曲者だ、と。

「ええ、まあね」

桐生はその花をテーブル上に戻した。

「ちなみに、トリカブトって全草に毒を含んでいるんですよ」

「花にもですか？」

「ええ。蜜にもね」

桐生は微笑する。口になっている内容には似合わない、穏やかな笑顔だった。

「園芸店でも品種改良したものを取り扱っていますし、山地の草原や林には自生しています。春先には芽を野草と間違って食べてしまう中毒事故が起きることもあるんですよ」

「え、でも」

松林は不思議そうに花を見つめた。

「これって虫媒花なんじゃないんですか？ 蜜にまで毒があるって……」

「トリカブトの毒というのは神経毒の一種です。アルカロイド系なので」

「神経毒……？」

「神経伝達を阻害するんです。つまり、シナプスに悪さをする」  
「……………」

文系の松林には理解しにくい話である。桐生は丁寧に説明を続けた。

「昆虫にも神経系はあるのですが、虫が主に使っている神経伝達物質は人と全く違います。つまり、人にとっては毒物であっても昆虫にとっては何の影響も無いわけです」



「……はあ」

松林は今一つ釈然としないながらも頷いた。

「しかしこんな危ないものが花屋で売っているんですか」

「まあ、園芸植物になっている場合は毒性が薄れていると思いますけどね。毒の多い根は口にするべきではないでしょうが」

「それにしても」

松林は苦笑して桐生を見つめた。

「随分詳しいですね。医者はそういうことも勉強するんですか？」

「まあ中毒を治療する機会もありますが、これはどちらかというと単なる僕の趣味です。お気になさらず」

「……………」

松林は肩をすくめる。毒物が趣味だといわれて気にならないわけがない。

鑑識の者たちの到着が待ち遠しかった。

### 3

鞆に入っていた見覚えのない封筒を見て、彼女はそれを急いで上着のポケットに押し込んだ。部屋を足早に出ようとしたが、見咎めた上級生に尋ねられた。

「どこに行くの？ まだ帰れないわよ」

「……分かってます」

自分でも頬が強張っているのが分かる。

「ちょっとお手洗に……」

「なんだ」

先輩の顔は目に見えて緩んだ。緊張しているためにきつい声が出たのだろう。

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

「はい。すみません」

彼女は後ろ手に扉を閉め、廊下を歩んだ。——こつん、こつん。靴底と床の立てる音が耳障りだ。

「冴木先輩……」

呟いて廊下を曲がり、女子用手洗いに入る。個室の鍵を掛け、ポケットから封筒を取り出した。

表には自分の名前が書かれている。筆跡には見覚えがあった。震える手で便箋を取り出す。白地に灰色の罫線が引かれた、シンプルなもの。細い黒のペンで几帳面に書かれた綺麗な文字。

その一行目が目に飛び込んでくる。

『あなたがこの手紙を目にする頃、私は死んでいるかもしれない。それとも一命を取り留めているのかしら。』

「……………」

呼吸が上ずる。

目まぐるしく眼球が動くのを自覚した。短い文章にも関わらず、文字がまともに頭に入っていない。だが、ある部分に視線が吸い寄せられた。

『気をつけなさい。私を殺すのは、……』

彼女は荒々しく便箋を便器に突っ込み、流水レバーを押す。

「……そんなこと、信じてない」

流水音に紛れて彼女の言葉は誰にも届かない。

「私は、信じてない」

見開かれた大きな瞳からつう、と涙が零れた。

「楽屋に入りたい？」

「ええ。もし良かったらお願いできませんか」

「いや、それは……」

舞台袖に立って現場検証の様子を見ていた伊吹は、渋い顔で草摩を見返した。

「君が入りたいのかい？ 中に友達でも？」

「そういうわけじゃないんですが」

「私の友達がいるんです」

草摩の一步後ろに立っていた絵音がずっと進み出た。伊吹はますます訝しげな表情になる。

「君の？」

「ええ」

強い意志を瞳に宿し、絵音は頷く。伊吹は困ったように首を傾げた。

「……ええと、君の友達は今回の事件に何か関係があるのかい？」

「分かりません。でも……」

少し考え込むように視線を落とした絵音は、またすぐに顔を上げた。

「以前、その友達から電話がありました」

「ほう」

「何か悩みがある、と言って」

「悩み、ねえ」

「ええ」

「その友達の名前は？」

「それは、でも……今回の件に関係あるかどうかはまだ分かりませんし」

「それはこちらで判断することだよ」

伊吹は言う。絵音は軽く眉を跳ね上げた。だが口調はあくまで穏やかだ。

「今日、彼女と会って話を聞く約束でした。でもこんなことになっ

たから……」

「で、その彼女の名前は？」

「えっと、伊吹さん」

草摩が口を挟んだ。

「これからその友達に話を聞いてくるっていうのはどうでしょう」

「何？」

「もしかしたら今回の件に関係あるかもしれないし、ないかもしれない。とりあえず話を聞くだけでも」

「しかし……」

伊吹はあくまで渋っている。

草摩は絵音が軽くつま先で床を叩いていることに気付いた。どうやら彼女は警察官を相手にしても反骨精神旺盛らしい。困ったものだと思うが、どこか微笑ましい。——ここは自分が交渉しなければなるまい。草摩は意を決し、口を開いた。

「楽屋中を探して、不信な人間は見当たりましたか？」

「いや」

「それと、被害者の盛られた毒は」

「トリカブトかと推定しているが」

伊吹は言い終わってから、あっという顔をした。さすがにそこまですぐに言うつもりはなかったのだろう。だが、草摩は彼のその表情を無視し、少し考える。

「確か、速効性の毒ですよ」

「……そうだな」

「良く知ってるわね」

しぶしぶ認める伊吹を目の前にして、絵音がこそそと彼に告げた。彼女の吐息が髪を揺らして頬を掠める。くすぐったい。

「昔、親父が言ってたんだ」

草摩は微笑んだ。

「その点突いてアリバイに使われたこともあるって」

「へえ……」

「とりあえず」

草摩は伊吹に向き直る。

「彼女が舞台に出てから十数分。……おそらくその前にはリハーサルが行われていたんでしょね」

「そうだな」

伊吹は手帳に書きとめられたメモに目を落とす。開演は十四時だったが、リハーサルはその日の朝九時から行われていた。十一時から十二時までが昼食時間。その間、一同はあらかじめ量販店に注文していたお弁当を食べている。また、被害者はペットボトルに詰めたお茶を持参してきていた。

「のどあめなどを口にした可能性は？」

「被害者の鞆から袋が発見された。お茶と一緒に今鑑識に回している」

「あめ、誰かにもらった可能性もあるわ」

絵音がぼつりと呟く。

「女の子同士だと良く配り合うから」

「そうだね」

草摩は頷く。そして伊吹の顔を見た。

「つまり、彼女は九時からこの会館を一步も出ていない」

「そうだ」

「口にしたのは皆と同じお弁当、持参したお茶、仲間内で食べたのどあめ」

「おそらく」

「毒は多分経口摂取でしょうね。そうなると犯人は」

「内部の者……か」

伊吹は呟く。医大生による殺人——か。命を守るために医師を指摘したもののたちのはずが、何故。

「まだ分かりませんけどね」

草摩は軽く首をすくめた。

「弁当屋にだって問い合わせなくちゃいけないだろうし、外部の者

がりハーサル中に楽屋に忍び込んだ可能性だってある」

「あ、ああ」

「あの、警部さん」

「警視だ」

絵音の言葉を伊吹はやんわりとした苦笑で訂正した。

「警視さん」

絵音の黒い瞳が伊吹の目にぴたりと視線を合わせる。伊吹は、自分の瞬きの回数がわずかながら増えたのを自覚した。

「警察に何か、話をしに来た子がいましたか？」

「まだ簡単な聴取しか行っていないからな。……ああ、被害者の妹がいたから、病院に行ってもらったけれど……」

「妹？」

「ああ。音大生で、姉のコンサートを見に来ていたそうだ。双子なんだと言っていたかな……被害者にそっくりでびっくりした」

——もしかして、先ほどの女性だろうか。こっそり見に来たといっていたが、もしかすると……それに、双子なら見覚えがあったのかも頷ける。冴木百合子はK大だ。草摩が大学内で見かけていたのかもしれない。

絵音が再び口を開いた。

「もし、友だちの悩みが今日の事件と関係があっても」

草摩は何を言うのかと絵音の横顔を見守った。

「彼女はそれを警察に言うかどうかは分からない」

「……………」

伊吹は黙った。

「明らかに関係があれば言うかもしれない。でも、もし彼女の判断で『関係がない』ということにしたら……」

「君がそこまで心配する必要は」

「確かにありません」

絵音は伊吹に指摘される前に頷いた。

「でも、もしかしたら私が彼女から聞き出す内容は、警察には必要

な情報かもしれない」

「……詭弁だな」

「詭弁って」

絵音はくすつと笑った。さめた笑顔の割に頬が紅潮している。何か悪事を楽しんでいるような表情だった。

「頭が受け付けることのできないロジックのことですよ。勿論、ロジックの態をなしていない詭弁もあるけれど」

「何が言いたい？」

「ロジックの正誤は、それを理解したものには分からない」

絵音は続けざまに言う。

「七条君の言うとおり内部犯の可能性が高いなら、中に入っただけで無差別に私を襲ってくることはまずあり得ない。外部犯なら既に楽屋にはいない。内部犯は私を襲わない。まあ、よほどまずい情報でも入手しない限りですけどね。でもそれはそれで向こうの落ち度を誘うことになります」

「危険にさらされてからでは遅いだろう？」

「一応」

草摩はのろのろと手を上げる。

「俺も行きますよ。一人で行くよりはいいでしょう」

「しかし」

「警視さんが天秤にかけて下さい」

絵音は厳しい口調で言い切った。

「私の友達から得られる情報に僅かでも期待するか、それとも無視するか。発生するリスクとベネフィットを計算して、プラス値の多い方をとればいいんですから」

「……………」

伊吹は頭を抱えなくなった。

理屈では良く分かっている。このままこの二人を中に通したところで大して問題はないだろう。捜査員の邪魔をするとも思えない。友達に会って話をする。それだけのことである。

草摩が一緒なら絵音が共犯者の手引きをするということもあり得まい。いや、この状況で彼女が容疑者側に手を貸せば自分に疑いがふりかかることなど百も承知だろう。彼女の頭の回転は決して悪くないようだ、何か実のある情報でも得て帰ってくるかもしれない。しかし警察官として、現場に無関係な人間を立ち入らせることはできないのだ。

「まいったな……」

呟いて伊吹は顔を上げる。若い二人の顔を交互に見て、軽く両手を上に挙げた。

「私は見逃す。できるだけ早く戻って来い」

「ありがとうございます!」

絵音は丁寧に頭を下げ、草摩ににっこりと笑みを浮かべて見せた。草摩は済まなさそうな表情で伊吹に軽く会釈する。

伊吹はやれやれ、とでも言いたげな表情で彼らを見送った。

## 5

楽屋に通じる廊下に入ると、絵音は携帯を取り出してメールを打ち始めた。友達を呼び出しているのだろうか。

「ねえ、私たちが話している間、あなたはどうする?」

「どうするもこうするも……」

別行動をすれば彼女が彼女についてきた意味がなくなる。

「やっぱりさ、俺がいたら駄目かな」

「駄目っていう訳ではないけど」

絵音は言いくさそうに口ごもった。

「多分、あの子の相談って恋愛がらみじゃないかと思うのよね」

「……なるほど」

草摩は苦笑する。初対面の異性の前では、随分と話づらい話題だろう。



「でもそれって今回の件と関係あるのか？」

「分からないけど、確かあの子の彼氏は同じ合唱部内なのよ。それで最近悩んでいたっていうから……。まあ、関係ない可能性が高そうだけど」

「そうだな」

背後から足音が近付いてきて、彼らはその場で振り向いた。

絵音よりは幾分か小柄な女性。髪はセミショートで童顔の、可愛い顔立ちである。

草摩はあつと息を呑んだ。同級生の吉原奈津子だ。彼女は舞台上で女性陣が身につけていた、黒のロングスカートと白いブラウスを着ていた。

「絵音ちゃん」

「ごめんね、急に呼び出して」

「ううん、いいの。私も話したいことがあって」

絵音の目の前で立ち止まり、草摩をちらりと見遣る。

「どうも、七条です。同級生なんだけど……知ってるかな」

奈津子は案の定困ったような表情で草摩を見ている。大学でも話したことはないし、あまり見覚えがないのだろう。絵音がとりなした。

「私の友達で、さっき警視さんにここにいらしてもらえるよう頼んできたのよ」

「あ、ありがとう」

草摩はきよろきよと辺りを見回した。

「ここ、捜査員が通るかもしれないから場所を移動しよう」

「どこに？」

「そこ」

といって廊下の反対側を指差す。

「『控え室』になっているみたいだから、ちょっと借りちゃおうか」  
「鍵、開いているかしら」

絵音は首を傾げるが、草摩がノブをひねるとあっさりと開いた。

「話があるならここでできるよ」

「うん」

「俺は席を外した方がいいよね？」

「……………」

奈津子は絵音の顔を窺う。絵音は困ったように微笑した。草摩は軽く手を挙げて頷く。

「じゃあ俺も友達の様子でも見てくる。俺一人だったら誰かに見つかって何とかなるから」

最悪の場合は伊吹の許可済ということにしてしまおう。草摩はこっそうとそう決意した。

「戻る時は？」

「携帯の番号とメルアド、知ってるよね？」

「ええ」

以前の飲み会の時に交換済である。

「じゃあそこに連絡して。もし俺の方が早かったらここに戻ってくるから」

「分かった」

「それじゃあ後でね」

身を翻した草摩の後ろで扉がパタン、と閉まる。彼は顔を引き締め、足早に廊下を歩んで行った。

## 6

細い廊下を歩んでいくと、大きな控え室らしき部屋の扉が見えた。おそらくここにほとんどの学生が居るのだろう。抜け出しているのは吉原奈津子一人かもしれない。――少しまずいな、と思った。

「あれ、草摩？」

声が聞こえたのと気配を感じたのは同時だった。草摩は振り向いて笑みを浮かべる。

「よう」

高城尚人。彼にこのコンサートのチケットを手渡した男だ。

「こんなところで何してるの」

「いや。ま、ちょっとね」

草摩は近付いてくる尚人を見つめる。黒いスラックスに白いワイシャツ。きちっとアイロンがあててあるのが印象的だった。彼は下宿しているはずだから、自分であてたのだろうか。

「部外者立ち入り禁止じゃないんだ」

「俺、警察に知り合い多いしさ」

「ああ」

尚人は頷いた。

「そういうこと」

その端正な横顔からは何もうかがい知ることができない。

「お前たちは、ぶらぶら出歩いてもいいののか？」

「トイレ。一応、このホールから出なければいいってことらしいからね」

「そうなのか？」

しかし、楽屋の外ではほとんど部関係者らしきものの姿を見ない。草摩の怪訝そうな顔を見て悟ったのか、尚人は肩をすくめた。

「みんなびびってるんだよ」

「……どこまで聞いている？」

「いや？ 特に何も。でも」

尚人はため息混じりに呟いた。

「先輩たちは色々知識もあるし……ま、想像の範囲だけど」

——誰かが冴木先輩に何かしたんだろ？ 声を低めて囁くように言う。

「……………」

草摩は軽く首を横に振った。

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。今のところ、何とも言えないな」

廊下の壁にもたれかかり、草摩は上目遣いに尚人を見遣る。

「なんで？ 先輩たちの話じゃ何か毒物でも飲まされたんじゃないかって。急病ならこんなに警察は来ないだろうし」

「飲まされたかどうかは不明だよ」

草摩は腕を組んだ。

「『飲まされた』っていうと彼女以外の誰かの意志が絡んでくるけど、今の段階じゃそうとは限らない」

「自分で飲んだかもしれない……ってこと？ 自殺？」

「可能性はないわけじゃない」

「……死んだのか？」

「……?!」

しまった。草摩の表情が目に見えて変わった。尚人が息を呑む。

「まさか……」

「後でみんな知ることにはなるだろうけど」

草摩は視線を床に落とした。

「今はあんまり言うなよ」

「何で？」

「警察が関係者に言わないのはそれなりの考えがあるからだと思うから」

「考え？」

尚人は不思議そうな表情で鸚鵡返しに聞き返す。草摩は顔を上げた。

「もし関係者の中に殺人者がいる場合、そいつはまだ自分の目的が完遂されたかどうか分からない訳だろ？」

「そうだな……なるほど」

尚人は頷いた。

「焦ってボロを出す可能性もなくはない……か」

「そう上手くはいかないと思うけどね」

草摩は肩をすくめた。

「もしこれが他殺だとすれば、きっとアリバイを完璧なものにして

いるはずだ」

冴木百合子は舞台上で倒れ、死んだ。それは、その場にいたもの全員が目撃している。

「かなり自分の犯行計画に自信があるんだろう」

「……そうだね」

「なんて」

草摩は小さく笑った。

「お前が犯人だったらこういうの言っちゃまずいよな」

「冗談きついよ草摩」

「分かってる」

軽く尚人の肩を叩いた。

——実際、草摩は無条件に尚人を信用しているわけではなかった。冴木百合子と彼の間には何の関係もないように見える。だが、それは草摩が知らないだけかもしれない。そもそも、人間関係がない場所に殺意が芽生えるわけがないなどは決して言えない。それはただの先入観である。

「俺、もう戻るわ」

尚人がそう言って軽く手を上げた。

「ん、じゃあ俺も」

草摩が壁から背中を浮かせたとき。廊下にかすかな——それでいて鋭い悲鳴が響いた。

## 7

遡ること十数分。

絵音は穏やかな表情で奈津子を見つめていた。引き結ばれた唇と真っ直ぐな眼差し。だが奈津子はそれを見ようとしなない。

「冴木先輩……どうなったのかな」

呟かれた言葉に、絵音は小さく息を吐いた。聞かれると思ってい

た。そしてそれに答えてはいけない、とも。

「分からないわ。まだ警察の人は何も言っていない」

「……そう」

奈津子是指先が白くなるほど拳を握り締めていた。絵音は意を決して口を開く。緊張のせいか喉の奥から胃液がせり上がってくるような不快感があった。

「もしかして」

舌で乾ききった唇を湿し、

「この前言ってた相談事って、今回のことと関係あるの？」

「……」

それは湖面に落ちた一粒の水滴だった。奈津子の表情がざわめく。

「それは……」

その声はわずかだが掠れていた。

「分からない」

奈津子は俯く。肩のラインが床に向かって落ち込んでいて、絵音は何となくその曲線を視線でなぞった。

「でも冴木百合子さんに——彼女に関係のあることだった。そうよね？」

「……うん」

頷いた。相変わらず表情は見えない。

「喉が渴いた」

絵音が呟くと奈津子が弾かれたように顔を上げた。

「あの、私お茶持つてるけど」

手に持っていたハンドバッグからペットボトルを取り出した。緑茶のボトルだが、中に入っているのは麦茶なのだろうか、液体の色は茶色だ。

「家で沸かしたの？」

絵音はそれを受け取り尋ねた。奈津子は頷く。

「なっちゃんは下宿だよね。そういうの、面倒くさくない？」

「絵音ちゃんは自宅？」

「まだ自宅通いだよ」

「大学までどれくらい掛かるの？」

絵音の喉を冷たいお茶が通る。

「今のところは一時間ちよつと。ただ、二年からキャンパスが変わるのよ。そうなると一時間半以上かかるから、下宿も考えてる」

「ふうん」

「それで……」

絵音が再び口を開くと、彼女の笑顔がさっと掻き消える。

「話って何？」

「……………」

奈津子は自分の拳に視線を落とし、やがて大きくため息をついた。  
「分かった。言うね」

絵音はじつと奈津子を見つめる。

「冴木先輩は、私の彼氏の元カノだったの」

「へ？」

予想外の言葉に、絵音は目を瞬かせる。

「それ、どういうこと？」

「言葉どおりの意味。遊斗——あ、彼の名前なんだけど。先輩は彼と付き合っていたの。春頃まで」

「春まで？」

「私と付き合い出す一ヶ月くらい前かな」

奈津子はそう言って弱々しく微笑んだ。彼女の付き合っている相手、岡崎遊斗はK大三回生である。冴木百合子とは同級生で、彼らが付き合っていたのは一年弱。告白したのは百合子からだったという。

「最後は彼の方がふったんだけど、別れるまでかなりもめたって」  
「ふうん……」

絵音は肘を突いて肩の辺りではねている髪をいじった。

「でも、もう別れたんでしょう？」

「うん、別れたんだけどね」

奈津子は困ったように俯いている。

「彼、結構しょっちゅう呼び出されていたの。ご飯食べに行こうとか、飲みに行こうとか。それも二人きりでよ？」

絵音は怪訝な表情になった。

「何それ」

「相談があるとか言ってね。変だとは思うんだけど……」

「失礼だけど、彼はそれに応じていたってわけ？」

「あの人、優柔不断だから」

奈津子は悲しい笑顔を浮かべた。

「最初は私も何も言わなかったの。でも、だんだん頻繁になってきて……いい加減おかしいんじゃないかと思いついて」

「そりゃそうよね」

絵音は不意に大きく息を吸い込んだ。何となく息苦しい。締め切った部屋のせいだろうか。

「彼に言ったの。そうしたら彼も悩んでいたみたいで……ちゃんと断るようになってくれた。『俺にはもう付き合っている相手がいるから、そういうのはできない』って」

「うんうん」

「でも……」

奈津子の表情がだんだんと暗いものに変化していく。絵音は顔を背けた。嫌な汗が噴き出す。

「今度は私の悪口を吹聴し始めたの。部活の人たちに」

「馬鹿馬鹿しい」

絵音は吐き捨てるように呟いた。そのプライドのなさに、彼女はぞっとする。

そんな経験はないが、自分をふった相手になど絶対彼女は見向きもしないだろう。彼女のプライドがそんなことは決して許さない。涙も見せずに笑って別れてやりたい。そう思う。

奈津子はじつとつむいていた。

「彼と冴木先輩が付き合っていたことは、誰も知らなくて」



「え、どうして？」

「冴木先輩が秘密にして欲しいって言ってたみたい」

「……良く分からないわね」

独占欲と執着心の塊のような行動を見せている割に、周りには知らせようとしない。どこか矛盾した行動のように思えた。

「そう。だから、彼女が私の悪口を言っているけど、その理由は誰も分からないわけ。冴木先輩は美人だし、歌も上手だし、ピアノだってすごいよ。普段は優しく賢くて、すごくいい人だから、疑いもせずに信じちゃう。それがたとえ嘘でも」

奈津子は辛そうに唇を噛む。

「彼は私を庇おうとしてくれたけど、あからさまなことはできなくて……それにやっぱり遠慮してたのかも」

「冴木先輩に？」

「……うん」

「そこはちょっと頑張って欲しいよね」

絵音は呟いた。奈津子も曖昧に頷く。

「でもあまり強く言えないじゃない、そんなこと。彼自身の意志で何かしてくれるならいいけど……私を守って、なんて言えない」

「そうだね」

机に突っ伏すようにしながら、絵音は奈津子を見つめた。暑い。

絵音は額に浮かぶ汗を指先で拭う。ふと、奈津子が眉を寄せた。

「絵音ちゃん……？ どうしたの？」

「え？」

絵音は顔を上げた。呼吸が浅く早くなっていることに、彼女はようやく気付いた。

「顔色が悪いけど……気分悪い？ 大丈夫？」

「うん、大丈夫……」

絵音はゆらりと机から身を起こし——そのままぐらりと床に倒れた。

「絵音ちゃん!!」

奈津子の悲鳴が聞こえる。頬をつけた床から震動が伝わってきたのは、彼女が何かを落としたのだろう。

息が苦しい。

体が暑い。

気持ち悪い。

ドアが開く音がして、誰かの腕が彼女を抱え上げた。

指だろうか、細いものが乾く唇をこじ開けて喉の奥に侵入する。

異物感にこらえかねて彼女は嘔吐した。

「救急車！ それから警察も！ 早く！」

叫ぶ声に意識が揺さぶられる。自分の真上にある横顔に焦点が合った。

——七条君……。

絵音はそのまま気を失った。

## 8

「刑事さん！」

血相を変えて駆け寄ってきた青年が、伊吹に向かって叫んだ。間違った呼称だがそう呼ばれるのは慣れている。それに何より、彼の切羽詰った様子が気に掛かった。

「何かありましたか？」

「絵音さ……いや、雪村さんが」

「……ユキムラ？」

呟いた伊吹ははっと息を吞んだ。さっき、草摩と共に楽屋に入っていた少女。

「いきなり倒れたみたいなんです。来て下さい！ それと救急車を」

「分かった」

伊吹は駆け集まってきた捜査員の一人に救急車の要請を命じ、残りのうち数名を連れて楽屋の廊下を走った。——やはりあの時、許

すべきではなかった。悔悟の念が頭をよぎる。

「この部屋です！」

先頭を走っていた青年が足を止めた。

伊吹は開け放たれたままの扉から中に入る。部屋の中央近くに少女が倒れているのが見えた。気道確保はされているらしく、青ざめた顔があらわになっている。眼を閉じ、荒い息を付いている様子が見えた。その傍らに草摩が屈み込んでいる。

ぴしゃり、と濡れた靴音がして足元を見ると茶色い液体が床を浸しており、隅には口の開いたままのペットボトルが落ちていた。

「絵音ちゃ……そんな、何で」

壁際に立ちすくんでいる少女を一瞥し、ひとまず伊吹は絵音の方に歩み寄った。草摩が顔を上げぬまま答える。

「呼吸はしています。脈も特に乱れはない」

伊吹は一通り確認し、頷く。そして草摩を見遣った。

「吐かせたのか」

「……はい」

「そうか」

とりあえずは賢明な処置だ、と伊吹は思った。

「意識はないようだが」

「救急車は」

「間もなく来る」

伊吹はそう言うのと声を低めた。

「君が付いていながら、何故こんなことに」

「少し場を離れたんです」

草摩は負けず劣らず小さな声で囁いた。

「吉原奈津子と、二人きりにした」

「吉原奈津子……」

鸚鵡返しに呟き、はっと顔をあげる。その視線の先にいた小柄な少女は、怯えたようにあとずさった。伊吹はひとまず視線を逸らした。

「この床は……茶か？」

「ええ。雪村さんは持っていないませんでした」

「吉原奈津子のものか……」

伊吹は捜査員を呼び、転がったペットボトルに残っている液体を分析に回すように告げた。

「彼女なのか？ 彼女が……」

伊吹の言葉に草摩は首を横に振る。

「まだ分かりません」

「しかし」

「まだ、材料が少なすぎる」

草摩は呟いた。

「……………」

確かに、現状で吉原奈津子をどうにかすることはできない。伊吹は頷いた。

そして、ふと気付く——草摩の握り締められた拳は、膝の上で小刻みに震えていた。

9

雪村絵音が救急車で運ばれた後、伊吹は吉原奈津子と高城尚人に部屋に戻っているように告げた。

草摩は振り向きもせず、部屋の真ん中をじっと見つめている。

「俺がここに来たときも」

淡々とした口調に、押し殺された感情の奔流を感じた。——あの時と同じだ。伊吹は彼の横顔を見ながら、既視感に襲われた。

「伊吹さんが来たときの状況と何も変わりません。床はびしょ濡れだったし、雪村さんは既に倒れていました。吉原さんは席から立った状態で立ちすくんでいた」

「部屋の中には二人きりだったのだな？」

「それは吉原さんに聞いた方が良いでしょうが……」

「いや。まずは君に聞きたいんだ」

「……………」

草摩はようやく真っ直ぐに伊吹の目を見、やがて頷いた。

「それでは、やはり彼女が……？」

「いや、それでは不自然な点があります」

草摩は言った。

「何故わざわざ二人きりの時に実行したのか」

「……というのは？」

「自分を疑ってくれというようなものでは？」

「それはそうだな」

「それと」

草摩は床を見た。ペットボトルは持ち去られているが、床はまだ濡れたままだ。

「何故、冴木百合子が死んだ日に雪村さんを害しなければならなかったのか」

「どういう意味だ」

「吉原さんが最初の被害者を殺したのか、そうでないのかによって事情は変わりますが……」

草摩はゆっくりと部屋の中を見回した。窓のない、小さな部屋である。扉以外からは誰も出入りできないことは、間違いない。

「まず、彼女が二つの事件両方を手がけたとしましょう」

「うん」

「最初の事件について、彼女は特に疑われていたわけではない。何も今日すぐに行動をうつす必要はなかったはずです」

「雪村絵音だけは疑っていた。としたら？」

「だとすれば、わざわざ吉原さんと二人きりになろうとするでしょうか？」

「自首するように説得したのかもしれない」

何となく、彼女はそういうことはしなさそうだな、と草摩は思っ

た。だが口に出したのは別のことである。

「そんな相手の出したものをおいそれと口にするかどうか。俺はしないと思います」

「……それもそうだな」

伊吹は腕を組んだ。無理に飲ませるといっても、体格では背の高い絵音のほうが有利だ。吉原奈津子がほどの怪力の持ち主ならば別だが、そうも見えない。さらに、近くにいた草摩が言い争う物音も絵音の声も聞いていない。吉原奈津子の悲鳴ははっきりと聞こえたのにも関わらず、である。

「もし雪村さんのことが最初の一件とは無関係だとしたら……」

草摩は話を再開した。

「吉原さんは一体何故今日という日を選んだのか。元々今日雪村さんと彼女は会う約束をしていたようですが、それにしてもこんなイレギュラーな出来事が起こった日にわざわざ決行しなければならぬ理由はない。警察もつめかけているのに」

「アリバイを完璧にして我々を証人にするというならともかく……」  
「ええ。いくら何でも馬鹿ですよ、こんなの」

草摩は吐き捨てた。伊吹はその肩に優しく手を置く。

「あまり自分を責めないほうがいい」

「……………」

草摩の体がぴくりと震えた。

「むきになると判断が狂うこともある。落ち着かなければ」

「落ち着いてはいるつもりです……けど」

草摩は俯く。

「俺があの時……二人きりにしなければ……」

「……………」

「いつだってそうだ」

片手で顔を覆い、草摩は呟く。

「いつだって、俺のいないところで誰かが傷つく」

親父も、

桐生も、

雪村さんも。

「俺の周りの人は……俺のいないところで……」

不意に、伊吹の胸の携帯電話が鳴った。伊吹はそれを手に取る。

二言三言交わして切った後、彼は草摩の頭をくしゃ、と撫でた。

「……………」

驚いて顔を上げた彼に、伊吹は微笑む。

「雪村絵音が眼を覚ました」

「え…………！」

「検査も済んで、これ以上処置の必要はないそうだよ。まあ大事を取って少し休んでもらうとのことだがね」

「良かった……」

顔を緩ませる草摩に、しかし伊吹はすぐに険しい表情になった。

「それと、彼女が摂取した毒物のことだが」

草摩の表情に再び緊張が走る。

「おそらく……トリカブトだ」

「……………」

草摩は言葉を失った。

## 10

眼を覚ました絵音は、立て続けに脈拍や血圧を測定されたが、特に異常はないようだった。自分の知らないうちに、左腕に点滴が一本繋がれている。絵音はぼたりぼたりと落ちるその点滴を、ぼんやりと見上げていた。

担当医が救急病室を出た後、入れ替わりに病室に入ってきた男を見て絵音は驚いた。

「桐生さん」

「大丈夫ですか？ 雪村さん」

端正な顔を曇らせ、桐生が歩み寄ってくる。

「ちょうど僕はあちらに戻ろうとしていたんですけど、貴方の名前を聞いてびっくりしましたよ」

「私もびっくりしました……」

絵音は呟く。

「どうして自分が倒れたのか、今でも良く分からなくて」

「何か飲んだり食べたりしましたか」

「友達がくれた、お茶を……」

絵音ははっと息を呑む。

「まさか、そこに何か……？」

「どうやら貴方の症状は軽度のトリカブト中毒に酷似していたようです」

桐生は淡々とした口調で告げる。

「早い段階で一度嘔吐していたこと、ここで素早く胃洗浄の処置をされたこと。そもそもの摂取量も僅かだったので、そういったこと全てが幸いしたようですね」

「……………」

絵音は俯いた。

「あの子、私を殺すつもりだったのかしら」

「……………」

桐生は黙って彼女を見つめる。

「でもおかしい」

絵音は独り言のように言葉を続ける。

「あんな、二人っきりのところでやったら自分が疑われるに決まってる。しかも周りに警察がたくさんいるっていうのに」

「……………」

桐生は僅かに眼を細めた。

「しかもあんな話を私に聞かせて、どうしようっていうつもりなの？」

絵音は低く呟き続ける。



「……何もかもがおかしいわ」

「貴方も大概変わった人ですね」

桐生が不意に口を開いた。淡い苦笑を浮かべている。

「毒を飲まされた後とは思えないほど冷静だ」

「……………」

絵音は一瞬無表情に桐生を見返し、すぐに微笑みを浮かべた。

「死んでしまえば、こんな風にものを考えることもできなくなりますから」

「……なるほど」

桐生は応えるように笑った。

「素敵な理由ですね」

「あ、そうだ」

絵音は座っていた寝台から立ち上がる。

「七条君にお礼を言わなきゃ」

「草摩君に？」

桐生は不思議そうな顔をした。

「ええ」

絵音は頷く。

「彼が倒れた私を見つけて吐かせてくれたんです。彼がいなかったらもう少し重症だったのかもしれない」

「……なるほど」

——また、彼は人が倒れているのを見たのか。

草摩の叫び声を思い出す。桐生が倒れたあの時、彼は明らかに錯乱していた。絵音の言うような冷静な対処など、とてもできるわけがないほどに。

「草摩君が、貴方をねえ……」

桐生は意味深長な笑みを浮かべる。絵音はその理由が分からないというようにきょとん、といていた。

### 第三楽章 Allegro

1

——もう、良く分からないの。

彼女は笑っていた。

何を信じていればいいのか、

何に縋ればいいのか、

何に祈ればいいのか、

何も分からない。

——違う。

信じるべきものなんて最初からなかった。

縋るものなんて最初からなかった。

祈りを聞いてくれる神様なんてどこにもいなかった。

彼女は涙を流して笑う。

ねえ、どうしてなの。

どうしてこんなことになってしまったの。

どうして今、私は死んでいこうとしているの。

2

桐生と絵音が病室に入る。そこには伊吹と草摩、そして白衣を着

た若い医師がいた。彼らの囲むベッドに横たわる少女を見て、絵音の顔色が変わる。

「雪村さん」

草摩が振り返って彼女の名前を小さく呟く。

「気分は大丈夫か？」

伊吹に尋ねられ、絵音は頷いた。

「良かった」

「天野先生」

桐生が医師に呼びかけると、天野は少し眉を陰らせて桐生を手招く。その気易い様子を見ると、どうやら知り合いのようだった。

「彼女の容態は？」

「重篤というわけではないけれど……この症状から見るとやはり」桐生はその先を読んで頷いた。彼女もやはり、トリカブト中毒だというのだろう。

伊吹が尋ねた。

「快復しますか？」

「その点については問題ないと思います」

天野ははっきりと頷く。

「胃洗浄、吸着剤の注入をしました。今はご覧の通り、多少は落ち着いたのか眠っています。瞳孔の散大などは見られませんし」

——三人目ですから処置も早く行えたので。天野の言葉を聞きつつ、桐生はちらりと少女の顔を見下ろした。蒼白な顔色で酸素を吸入している。絵音よりは重症だったのだろう。

「念の為酸素吸入をさせていますが、サチュレーションや血液ガスの値に問題はない。ヴァイタルサインは全て正常。おそらく、一両日中には快復するでしょう。後遺症も残らない可能性が高い」

「そうですか……」

伊吹が彼らに歩み寄ってくる。彼は先ほど天野から説明を受けたのだろう。手には黒いメモ帳が握られていた。

「少し雪村さんにお聞きしたいことがあるのですが、桐生さん、医

師として許可いただけますか？」

「大丈夫だと思いますが……」

桐生は答え、天野に視線を投げた。彼もまた頷く。

「病院の方から彼女の親御さんには連絡済みです。遅くとも二時間後には来れると」

「母は仕事で忙しかったのでは？」

絵音が口を開いた。

「できるだけ早く切り上げて来られるとのことでしたよ」

天野の微笑みに、絵音はかすかに顔を歪める。草摩はそれを不思議そうに眺め、やがて不躰だと思ったのか目を逸らした。

「どこか、空いている部屋はありますか？」

伊吹の問いに天野が頷いた。

「カンファレンスルームがあります。そこをお使い下さい」

「草摩君は……？」

伊吹に尋ねられ、彼は少し困ったような表情をした。

実際のところ、彼はこの事態にそう深く関わっている訳ではない。たまたまその場に居合わせた、それだけのことだ。彼の見聞きした情報は既に伊吹に知らせてある。そんな自分がこれ以上首を突っ込んでいいのかどうか……。

「一緒に、来て欲しいんだけど」

「？」

草摩は驚いて振り返った。

絵音がそこに立っている。病室のブラインドを通り抜けた陽光が、彼女の全身に光の縞模様を作っていた。軽く顎を引き、濃い睫毛の下の瞳が揺らめいている。彼の視線を受けて、絵音は慌てたように付け加えた。

「あの、私の記憶違いとかあるかもしれないし、私も自分が倒れた時の状況を知りたいし……」

「あ、ああ」

急に早口になった彼女に気圧されるように草摩は頷いた。

「うん。行きます」

「分かった」

伊吹は頷いた。

視界の端で捕らえた桐生はこんな状況にも関わらずのほほん、とした顔で笑っている。いや、にやけている。おそらく草摩と絵音のやりとりを見てのことだろう。足を踏んづけてやろうかと思うが、それこそそんな場合ではない。

天野医師とベッドに横たわる彼女を残し、彼らは病室を後にした。

扉が閉まる少し前、絵音は振り向いて彼女の顔を見る。

「なっ……ちゃん」

パタン、と空間が引き裂かれる音がした。

### 3

カンファレンスルームには白いテーブルが一つとパイプ椅子が数点置かれていた。窓には遮光カーテンが掛かっているところをみると、研修医の仮眠室として使われるのかもしれない。案の定、部屋の奥を除くと白いカーテンで仕切られたスペースがあって、シーツの乱れた小さなベッドがあった。

ぐるりとそこに座る面子を見渡し、伊吹は漏れそうになったため息をこらえる。

現場での捜査指揮は新たに署からやってきたベテランの警部補に任せている。とにかく今は情報を集めることが先決だ——伊吹はそう思い、吉原奈津子に乗せた救急車に同乗してやってきたのだった。

「あの」

絵音がぽつりと呟いた。先ほど伊吹と相對していた時にはあれほど精彩を放っていた彼女の瞳は暗く翳っている。無理もない、と伊吹は思った。人の死んだ場所で毒物を飲まされ、さらに友人も倒れ

た。気が滅入るなという方が酷な話だ。だが彼女は気丈さを保っている。それだけでもたいしたものだった。

彼女は誰の手にも縊らない、というようにぴんと背筋を伸ばしている。黒い瞳がまっすぐに彼を見つめた。

「どうして、なつ——吉原さんが、ここに」

「君が倒れてすぐに、我々は彼女を一端楽屋に帰らせた。捜査員を付き添わせて、高城尚人とともにね」

「尚人君と？」

「俺と喋ってたから、俺の後にすぐ来たんだ」

絵音が彼を「尚人君」と呼んだのが若干気に掛かるが、今ここでそれを追求している場合ではない。草摩は口早に答えた。

「……やっぱりあの時、七条君が助けてくれたのね」

絵音は少し俯き加減のまま、それでも口元の笑みは草摩にはつきりと見えた。とても柔らかそうな曲線だった。

「ありがとう」

「……どういたしまして」

「それはそうと」

桐生が口を開いた。

「吉原さんはいつ倒れたのですか？」

「楽屋に戻って数分後だ」

「ということは楽屋に戻る前にトリカブトを摂取した、というわけですよ」

「おそらく。楽屋には大勢の人がいた。彼女が何か不審な行動をしていれば誰か気がつくだろう」

現に捜査員も高城尚人も、彼女から目を離していないという。

「彼女の荷物は調べましたか？」

「ああ」

答えてからふと思う。これでは自分が尋問されているようではないか。伊吹は軽く座りなおした。このまま桐生のペースに巻き込まれるのは癪にさわる。

「ところで雪村さん」

「はい」

絵音が居住まいを正して伊吹を見た。

「貴方が飲んだお茶のボトルは」

持参した証拠品の中から、一つ選んで差し出す。勿論右手には手袋を嵌めていた。

「これでしたか？」

「……………」

絵音は少し眼を細めてそれを眺め、やがて頷く。

「そうです。その銘柄のボトルでした」

言い切ってから少し首をかしげ、

「でもいっばいだった中身が空になっているから、私が飲んだのがそれかどうかは……」

「ああ、いいんだ。それは」

伊吹は頷く。

「君が飲んだボトルが特定できれば、それで」

「待って下さい」

草摩が口を挟んだ。

「それ、どういう意味ですか」

伊吹が怪訝そうに視線を動かすと、草摩の瞳の放つ輝きとぶつかった。彼は、真っ直ぐに伊吹を見つめている。

「ボトルは、一つじゃなかったんですね？」

「え？」

絵音が呟く。

一瞬虚を衝かれた伊吹よりも早く、桐生は口を開いた。彼もまた、草摩の言おうとしていることを理解しているらしい。

「もしあの場にあったボトルが一つだったのなら、わざわざ絵音さんに確認を取る必要もない。いや確認は取るかもしれないけれど、それほどの優先事項とは思えません」

「……………」

伊吹は黙ったまま視線で桐生に先を促した。草摩も横目で桐生を見る。誰かに借りたのか、白衣を着た桐生の姿はいつもと雰囲気少し違って、知らない人のようにだった。まるでかつての、現場から掛かってきた電話を取ったときの父のようだと思う。

「中身の色も何も分からない状態で、それでもボトルの銘柄が確認されればそれで良い。それって、別の銘柄のボトルがあったかのよう」に受け取れますよね？」

「私が飲んだもの以外にも、ボトルが……？」

「ご明察だ」

伊吹はこらえきれなくなったようにため息を一つ吐き、テーブルの上に先ほどのとは別のボトルを置いた。

最初に絵音に見せたのは濃い緑のボトルで、白抜き文字が大きく踊っている。今度のボトルは全体的に黄緑色で、黒字で銘柄が書かれていた。こちらには中身がまだ入っているようだった。どちらも良く知られた緑茶メーカーのものである。

「少々不可解なことがあってね」

伊吹はそれらを前に腕組みをした。

「こちらの、今空になっている方。こっちにどうやら毒物が入っていたらしい」

「味は麦茶でした。それ」

「麦茶？ ……そうなのか。いや、そうかもしれないな」

絵音の言葉を聞いて伊吹はつぶやいた。

「そこまでの報告は受けていなかったが……ちょっと調べてみた方が良いのかもしれない」

「で、今入っている方のボトルは？」

「こちらはごく普通のお茶だよ」

伊吹はそう言った後、付け加えた。

「ウーロン茶、だけどね」

「……え？」

草摩は聞き返す。



「何で別々のお茶が？」

元々は緑茶のボトルだったところから見ても、恐らく中身は家で沸かし、詰め替えていたに違いない。

「ふつう、ウーロン茶と麦茶を両方常備しているとは思えないですよね。茶葉を買い置きしているのはともかく、同時に沸かすかな」  
桐生も首をかしげる。

「そもそも」

絵音が口を挟んだ。

「吉原さんは下宿ですし」

「……少々不可解だな」

伊吹は軽く髪を指で挟んだ。

「彼女からはまだ事情聴取ができる状態ではないし……」

「冴木百合子の妹さんは、何か言っていますませんでしたか？」

草摩に尋ねられ、伊吹は首を横に振る。

「まったく心当たりがないと言っていた。特に変わった様子もなかったらしいし……まあ、元々物静かな人だったみたいで、そんなに姉妹で話をするとはなかったみたいだな。ご本人もおとなしそうだった。またご両親が到着されたら何か話が聞けるかもしれないが……」

「そうですか」

草摩が絵音の方を見た。こうしてきちんと目を合わせるのには絵音が倒れてから初めてのこととで、絵音は少し瞬きする。一瞬、草摩の目が金色に光って見えた。

「雪村さん、吉原さんから何の話を聞いていたの？」

「……………」

絵音は彼女との会話の全てを思い起こす。それはまるでテープに録音されていたかのように鮮明だった。伊吹も桐生も興味津々といった様子で彼女の言葉を待っている。

絵音は意を決して口を開いた。

「自分と冴木百合子さんとの関係について、でした」

——あの人、優柔不断だから。

そう言った彼女の顔を思い出す。悲しげで、切なげで。

でもどこかほっとしているようにも見えたのは……冴木百合子がもういないと知っていたからだろうか。犯人だから……わかっていたのだろうか。彼女がこの世のどこにももういないことを。

彼女が語ったことが真実かどうかも絵音には分からない。

それでも、これは真実の一部。

吉原奈津子の願う真実の一部なのだと、絵音はそう思った。

#### 4

「吉原奈津子が現在交際している人は」

絵音は表情をこそぎ落としたように淡々と語り始めた。

「冴木百合子が以前交際していた相手だそうです」

「何？」

声を出したのは伊吹のみだった。桐生は無反応、草摩は軽く目を見開いている。

「しかし、そんな話は誰も」

「『誰にも知らせていなかった』。彼女はそう言っていました」

絵音は伊吹の声に被せるように言葉を発した。草摩が尋ねる。

「どちらの交際を知らせていなかったの？」

「冴木さんの方よ。彼女は、何故か人に彼との交際を知られることを嫌がっていた。だから、本人たちと吉原さん以外はほとんどその事実を知る者はいないそうです」

「それで？」

桐生が促した。絵音は再び顔を真っ直ぐに向ける。その瞳は誰にも焦点を合わせていなかった。

「それで……冴木さんと別れた後、彼は吉原さんと交際を始めた」  
「別れたのはどちらから？」

伊吹の問いに絵音は即答した。

「彼、だそうです」

「その彼というのは誰なのかな」

絵音の表情にかすかな当惑が浮かぶ。

「下の名前だけ彼女から聞いています。フルネームは、ちょっと……」

「構わない。事情を聞きたいのでね、調べさせてもらう」

「ユウト。字は分かりません」

「分かった」

「で、話はそれだけじゃないよね」

草摩の瞳を絵音は一瞬だけ見る。彼女は何故か妙に冷めた視線をしていた。今ここで話をしていることなど自分には何の関係もない、というような……。絵音が頷いたために視線はぶれ、彼女は草摩から目をそらした。

「どうやら冴木さんが彼との別れに納得していなかったようで、もめていたらしいんです」

「具体的には？」

「頻繁に電話が掛かってきたり食事に呼び出されたりするので、彼はそういうことをやめるよう彼女に申し入れたそうです。『既に付き合っている人がいるから』と」

「それで」

「それで、吉原さんの悪口を言いふらし始めた……。彼女はそう言っていました」

桐生の言葉に導かれるように絵音はそう言い、やがてふ、と口元を緩めた。

「……………」

何か言おうとしたように開かれた唇が音もなく閉じる。

「それが事実だとするなら」

伊吹は眉を寄せる。

「吉原奈津子には冴木百合子を殺害する動機があったことになる」

「伊吹さん」

草摩が口を挟んだ。

「待って下さい。今の話は『吉原奈津子』がしたものです。いいですか、そこを忘れないで下さい」

「忘れてなどいないよ」

伊吹が少しむっとしたように鼻から息を吐いた。

「彼女のした話が本当かどうか。僕らには判断が付きません。勿論」

草摩はちらりと絵音を見た。

「雪村さんにもね」

「ええ、そうね……」

絵音は少しぼんやりした様子で頷いた。確かにそうだ。彼女は事態の部外者に過ぎず、彼女の話の真偽を判断できるほどの情報は持ち合わせていないし、判断する立場でもない。

——だがあの話を聞いている時、彼女はそれを信じていた。一体何故だったのだろうか……。

「だから」

草摩は軽く右手を広げて自分の右頬に当てた。ちょうど人差し指の先がこめかみを押している。

「他の事に注目したい」

「他の事？」

「そうです」

草摩は頷く。桐生は穏やかな表情で彼を見つめていた。

「何故、彼女の話の後にあれが起きたのか——」

「私が倒れ、そして彼女も」

絵音は囁くように呟いた。草摩は無言で首肯する。

「それが重要なことなのか？」

「とても」

「何故」

草摩の真っ直ぐな視線が伊吹の眼差しを射る。デジャブを感じた。  
「俺は雪村さんの話を聞いて、吉原奈津子は一連の事件の首謀者ではないと考えましたから」

5

「なっちゃんが倒れたんだって」

「嘘！」

「本当よ。……なんか、一緒に話してた友達も一緒だったとか……」  
「ええ?!」

楽屋の中でひそやかに囁かれ始めた話を耳に挟み、岡崎遊斗おかざきは蒼白になった。側にいた尚人が気遣うように彼を見遣る。

「先輩……」

「な、なんで奈津子、いや、吉原が……」

彼は奈津子と岡崎が交際していることを知っていた。

「無事なのか？」

「そ、それは」

高城は目をそらす。

「俺には、ちょっと……」

「そうだよな」

岡崎はくしゃりと自らの髪を掴んだ。色は黒く、固そうな質感。

高城の茶色に染めた、柔らかな髪とは違っていた。

「くそ……どうしてこんなことに……」

「……………」

高城はまるで独り言のように呟いた。

「吉原さんと一緒にいた友達が先に倒れたんですよ。その後、彼女が」

「友達？ 合唱部か？」

「いえ、違います」

「……………」

岡崎は不思議そうに高城を見つめた。彼は説明を加える。

「俺のクラスメイトで、吉原さんの予備校時代の友達です」

「部外者が何で……」

「吉原さんが」

高城は真っ直ぐに岡崎の瞳を見つめた。

「話があるって呼んでいたらしいですよ」

「……………」

「こんな時に、何の話だったんでしょうか」

「……………」

岡崎は高城の大きな瞳を見返した。困惑の色が湛えられている。

「俺には分からない……けど……」

「……………」

「けど、もしかして……」

岡崎は呟いて、はっと息を吞んだ。

「先輩？」

高城の怪訝そうな声にも答えず、彼はぶつぶつと呟き始めた。その声はあまりに小さくて高城には聞き取ることができない。

彼はため息を一つ吐いて座っていたパイプ椅子から立ち上がった。冴木百合子が倒れてから数時間。そのわずかな時間に、冴木百合子を含めた三人の女性が次々と倒れたのだ。尋常な事態ではない。

「トリカブト……か……」

高城は座ったままの岡崎の頭を見下ろす。その言葉だけが妙にはつきりと聞こえた。岡崎は足を組んだまま、手のひらに顎を載せている。その表情は良く見えない。

高城はふう、と再び深いため息を吐いた。

「どういう……ことだ？ 吉原奈津子が首謀者ではない、というのは……」

吉原奈津子の交際相手を探すように指示した後、伊吹は草摩に向き直った。テーブルの上をぼうつと眺めていた草摩ははっと顔をあげる。

「え、何ですか？」

「いや、だから……」

「ああ、そうか」

絵音が不意に呟いた。

「そういうことなのね」

「……………」

視線が絵音に集中する。彼女はまるで童話を読むような調子で語り始めた。

「彼女がもし冴木百合子が死んでしまったということを知っていたなら、私にそんな話をするわけがない」

草摩は無言で頷く。

「だって彼女はもういないのだから。彼との間を邪魔する存在ではもはやあり得ない」

「それに」

桐生が口を開いた。

「むしろ自分に疑惑が向く原因にもなります。現に伊吹さんは彼女を疑っておられる」

「それはそうだな……」

「以前から彼女は私に話をしたがつていました。悩みがある、と」

「そうなのか」

「そして今日、この状況にも関わらず彼女は私に悩みを打ち明けた」

「……ああ」

「彼女がもし冴木百合子を殺したのなら」

絵音ははっきりと言った。

「馬鹿過ぎる」

自分の友人を「馬鹿」呼ばわりする彼女に、伊吹は僅かに目を剥いた。桐生は笑みを浮かべ、草摩は特に反応を見せずに口を開く。「まあ、そういうことになる」と雪村さんと吉原さんが何故倒れたのか……その理由が分からなくなるんですけどね」

「あと、ペットボトル」

桐生はぼつりと呟いた。

「……一つ、可能性はありますが……」

「え？」

伊吹が桐生の方を向いた。

「そ、それはどういうのです？」

桐生は顔を上げてにっこりと微笑んだ。

「さすがにこれは憶測の域を出ません。何か裏づけが出てきてから言いますよ」

「しかし」

「桐生」

草摩が口を挟む。彼は真剣な、どこか必死にも見える眼差しをしていた。

「これ以上は誰も……？」

桐生はその問いの意味を悟り、かすかに首をかしげた。

「吉原さんの交際相手がわかればいいんですけれど」

「それならすぐだろう」

伊吹は言った。

「彼らが冴木百合子のように交際を秘密にしていなかったのなら、必ず誰かが知っている」

「……そうですね」

「とはいえ」

草摩は深く椅子に腰をかけて息を吐いた。

「容疑者候補の中から吉原奈津子を完全に除外して考えることはできませんけどね」

「……………」



伊吹に視線で問われた草摩は苦笑する。

「だって」

「人間が馬鹿じゃないなんて、とても言えないものね」

絵音がぼつりと呟く。冷たい響きを帯びた声には、どこことなく哀れみと諦めの色が秘められていた。

「……………」

しばらく無言で立ち尽くしていた伊吹が、己の携帯の着信音に気付き部屋から出て行く。

「草摩君」

扉の閉まる音がすると同時に、桐生は草摩に声を掛けた。ブラインド越しの光を見ていた草摩は、振り返ることなく答える。

「どちらだろう」

「……ええ」

桐生は頷いた。

「でも証拠がありますか？」

「分からない……もしかしたら」

「もし彼女だったのなら？」

「そう」

「……彼に期待するしかなさそうですね」

桐生は苦笑した。

二人の会話を黙って聞いていた絵音がぼつりと呟く。

「私は、実験台だったのね」

「……………」

草摩は驚いて顔を上げた。桐生もまた息を呑む。

絵音は左手で自分の右肩を抱いていた。表情を失った顔は白い。

「そうか。そういうことか……」

「雪村さん」

不意に草摩が彼女に声を掛けた。

「何？」

絵音が顔をあげる。

「俺も名前で呼んでいいかな」

「え？」

絵音はきょとんとして草摩を見る。

「絵音さん、って呼んでいいかな」

草摩は真っ直ぐに彼女を見つめていた。

「……いい、けど」

「ありがとう」

草摩は先ほどのまでの深刻な表情とは似ても似つかない笑顔で礼を言う。絵音はくすりと微笑んだ。

「こちらこそ」

「……どうもお邪魔しました」

桐生がわざとらしく一礼して部屋を出ようとした、その時。

「絵音！」

扉が開いて一人の女性が飛び込んできた。小柄で若々しい。表情は青ざめていたが、絵音の姿を視界に捉えた途端にそれは緩んだ。

「……母さん」

絵音は茫然と呟く。

「絵音！」

草摩と桐生の隣を走り抜けた女性は、絵音をしっかりと抱きしめた。

「無事で良かった……」

水色のサマースーツに身を包んだ彼女は、自分より遥かに背の高い絵音の背中を撫でる。絵音はなされるがままに彼女を抱き寄せた。

「心配かけてごめんなさい。仕事も抜けさせちゃって……」

「何を言っているの」

母は顔を上げて微笑んだ。その目尻は濡れている。

「貴方が一番大切なんだって、そう言っているでしょう？」

「……………」

絵音も微笑んだが、その表情には影があった。

「……………うん」

頷くのを確かめてから、母はもう一度娘を抱きしめる。

「本当に、良かった……」

「……………」

絵音はまるで胸に棘を抱きしめているように、顔を顰めていた。痛いのに、離すことができない。そんな表情。

草摩と桐生は無言で彼女らを見守る。やがてぽつりと桐生が呟いた。

「似て、いる」

草摩は彼の顔を振り仰ぐ。そこには常にないほど動揺している彼がいた。その表情はどこか今の絵音にも似ていて……。

彼を見ていることに気付かれないうちに、草摩は再び絵音を見遣る。

「母親……か」

何故絵音と桐生が揃って辛そうな表情をしているのか……彼には分からなかった。

## 7

伊吹の携帯電話に掛けてきたのは部下のうちの一人で、吉原奈津子の交際相手を通して今そちらに向かっている、というものだった。案外あっさり探し出せたものだ、と思ったが実際のところはそうではないらしい。本人から名乗り出てきたのだという。

『名前は岡崎遊斗。K大医学部三回生だそうです』

「そうか」

伊吹は答えながら思う。しかし、一体何故わざわざ自分から……？

『もうそろそろ着きます』

「分かった」

伊吹は言葉少なに答えて電源を切る。

「……………」

暫く廊下に佇んで天井を見上げる。薄い石灰色の正方形のタイルの縁を、しばらく眺めるともなく眺めていた。やがて踵を返し、元居た部屋へと足を運ぶ。

「失礼——」

扉を開いて、思わず目を大きく見開いた。草摩が深々と頭を下げている、その後ろ姿を目にして。

8

遡ること数分。

部屋に落ちた沈黙を破ったのは絵音だった。立ち尽くす草摩を軽く視線で示して、

「母さん、彼が私を助けてくれたのよ」

「え？」

母親が振り返り、草摩を見つめる。草摩は慌てた。

「い、いや、助けただなんて」

「助けてくれたじゃない。先生だって草摩君の応急処置を褒めていたもの」

初めて耳にした「草摩君」と呼ぶ彼女の声。草摩は耳に血流が集まるのを感じる。

「……………」

母親は不躰にならない程度に彼を観察し、やがて穏やかに微笑んだ。

「ありがとう。お名前は？」

「七条です」

答えてからすぐに草摩は言い直す。

「七条、草摩です」

「七条君ね」

母親は上品な微笑を浮かべたまま頭を下げる。

「娘を助けてくれて、本当にありがとう」

「いえ」

草摩は居住まいを正した。照れていたような表情がさっと消え、変わりに痛ましいものを見るような――それを目の前にして無力な自分を責めるような、そんな目をする。口元からも笑みが消えていた。

「本当は……」

拳をぎゅっと握り締め、草摩は目を床に伏せた。

「一番近くにいたのに。止めることができなかった」

「え？」

聞き返される。草摩は低い声でもう一度呟いた。

「二人が倒れるのを、止められなかった」

「草摩君」

桐生が気遣うように声を掛けるが、草摩はそれを振り切るように頭を下げた。

「すみません……！」

カチャリ、とノブの回る音がして扉が開く。草摩は振り向きもせず、頭を下げ続けた。

「……………」

絵音は言葉を失っている。

――やがて、

「頭を上げて下さい」

優しい声が草摩の頭上に降り注いだ。絵音の母親のものだ。

「七条君。顔を挙げて」

呼びかけられ、草摩はゆっくりと姿勢を元に戻す。彼女が浮かべていたのは、相も変らぬ微笑みだった。

「私は現場を見ていた訳ではないし、今でも何が何だか良く分からないわ。本当に何が起こったのか――どうして私の娘が毒を飲まされたのか、誰がそんなことをしたのか、何も分かりません」

「……………」

「本当に、こんな恐ろしいことを貴方が防げた可能性があったのか、防げたならどうして防ぐことができなかったのか……そのことも、私には分かりません」

「母さん」

口を挟もうとした絵音を彼女は柔らかく押しとどめる。

「でもね」

彼女は穏やかに語り続けた。

「だからこそ、私は私が信じたいものを信じようと思うの」

「信じるべきもの……？」

呟いた草摩に、彼女は頷いてみせる。

「娘の言葉よ」

「……………」

草摩は小さく息を呑む。彼女は揺るぐことのないまなざしで彼を見つめていた。

「私の娘は、貴方に助けてもらった、と言ったわ。だから私はそれを信じます」

彼女はもう一度草摩に頭を下げた。

「ありがとう。七条君」

「……………」

草摩は言葉を失ったまま、ただ彼女を見つめていた。

——信じたいもの。

不意に草摩は体を震わせる。

——その言葉はパズルの最後のピースだった。

## 9

伊吹が困ったように口を開く。

「ええと、一体どういう……」

「いいえ、別に何も。ところで」

答えたのは桐生だった。有無を言わせぬ笑顔で、話を強引に変える。

「何のお電話だったんですか？」

「吉原奈津子の交際相手がここに来たそうだ」

「へえ……？」

草摩が怪訝な顔をする。

「随分早く見つかったんですね」

「ああ、いや」

伊吹は困ったように眉をひそめ、ふと気付いたように絵音の母親へと視線をうつした。彼女も気が付いたのだろう、軽く一礼した。

「雪村絵音の母でございます」

「ああ」

伊吹は頷き、改めて向き直った。

「K府警U署、署長の伊吹です。この度は……警察が現場に駆けつけていたにも関わらず、こんなことになって申し訳ない」

「軽症で済んで幸いでした」

母親は穏やかな声で呟く。その声に刺はない。

「ところで、絵音はもう帰ってもよろしいのでしょうか？」

「それは」

伊吹は返答に窮する。

彼女は被害者であり、既に聴取は終わっている。今日は帰しても支障はないだろう。また、何かあれば連絡をとればいい。しかし、今新たな要素である岡崎遊斗がここに到着した。何となく、彼女も交えて話を聞きたい——吉原奈津子から実際に話を聞いたのが彼女だから、ということもあるが、理由はそれだけではなかった。彼女は、どこか七条草摩と似た匂いがする。

「……………」

伊吹が眉を顰めて黙っていると、母親はわずかに語気を強めた。

「絵音は先ほどまで意識を失っていたんでしょう？ 今日はどう休ませてやって下さい」

絵音は母を制止しようとする。

「母さん、」

「絵音は黙っていて」

「そういうわけにはいかないわ」

絵音ははっきりとそう言った。伊吹に向き直る。

「私は、大丈夫です」

「何を言うの」

母親は咎めるような眼差しで彼女を見上げた。

「母さん」

絵音は伊吹を見たまま、しかし言葉だけは母親に向いている。

「確かに私はさっきまで倒れていた。そしてその前には人が一人死んだ。今も私の友達は意識不明」

「……………」

「そして、そのどれも……まだ原因も、犯人も——もし、そう呼ぶことのできる人間がいれば、だけど——分かっているのよ」

「そうなんですか？」

伊吹は問われて不承不承頷いた。草摩はただじっと絵音を見つめている。

「被害に遭った三人の中で、今意識があるのは私だけなの。私にしか話せないことがあると思う」

「それはもう終わったんじゃないの？」

「私には分からないわ」

絵音は伊吹に向かい静かに、穏やかに微笑んだ。何故今そのような微笑を見せるのか——伊吹には分からない。

「それは、プロフェッショナルにしか分からないことよ」

「……プロ」

母親ははっと気がついたように桐生に視線を投げた。彼は白衣を着ているから、医師だということは一目瞭然だろう。

「先生」

彼女は半ば縋るように彼に言う。



「あの子の体調は、無理をできるようなものではありませんよね？  
今日は休んだ方がいいって、そう言って下さい」

「……………」

桐生は、その細い手を軽く母親の肩の上に載せた。

「今唯一彼女の体調の中で心配する要素があるとすれば、それは精神的な疲労でしょう。他に何も後遺症などはありません」

「あの子は疲れています！」

「それは」

桐生は悟られない程度に苦笑を浮かべた。

「僕には分からないですね。ただ」

絵音の方へと視線を動かし、

「彼女の体調に万が一の異変があれば、僕がついている限りすぐに対処ができるでしょう。ある意味自宅にいる時よりも早く」

「……………」

「そして」

桐生は再び母親の方へと視線を戻した。

「自分に害をなしたものが分からないというストレス——それもまた、精神的な疲労の原因になり得るかもしれない」

「そんな」

怒りの眼差しで詰め寄る母親を止めたのは、絵音自身だった。

「もう少しだけ。待ってて、母さん」

「絵音……………」

「わざわざ仕事まで抜けさせて、悪いとは思っているの。でも」

「仕事のことはいいのよ。でも、貴方の体が」

「桐生『先生』がいるわ。それに」

絵音は突然きつい口調で言い放った。

「人が一人、死んでいるの」

——彼女は怒っている。草摩は唐突に理解した。具体的に、何に

対してなのかは分からない。しかし、彼女は今猛烈に怒っているのだ。

人の死に――怒りを感じている。悲しみよりも強く。

「私は、それを放っておくことができない」

「どうして……」

「だって、私は殺されたくないから」

母親が吞まれてしまっているのに気付いたのだろう。絵音は子供じみた笑みを浮かべ、そう答える。その笑顔がどこか作りものじみているのに気付いたのは、草摩と――そしてそんな母子のやりとりをじっと見つめていた、桐生だけだった。

## 10

しばし話し合った後、絵音の母はしぶしながら絵音の希望を容れ、階下の待合室で娘を待つことを了承した。それと入れ違いに、岡崎遊斗が捜査員の一人に先導されて伊吹たちの詰めているカンファレンスルームにやってきた。大きな布製の鞆を肩から下げ、それを両手で抱えこんでいる。

「君が……」

「岡崎です。K大医学部三回生の、岡崎遊斗です」

彼ははっきりとそう答えた。知的な好青年。それが、伊吹が彼に抱いた第一印象だった。

絵音がちらりと隣に腰掛けた草摩を見遣ると、彼はある一点に目をやり続けていた。岡崎の鞆。絵音は一瞬首を傾げかけるが、やがて彼の視線の意味を察して息をのんだ。

岡崎は周囲を見回し、早口に尋ねた。

「奈津子――吉原さんの容態は？ あと、もう一人倒れた方がいると聞いたのですが、大丈夫でしょうか」

「そのもう一人の方はこちらにいらっしゃる、雪村さんです。大事ありません」

桐生が医師としての顔で口を開いた。岡崎が絵音を見てほっとしたように表情を緩める。

「摂取量が僅かだったこともあり、症状は非常に軽く済みました。後遺症などの危険性もほばないでしょう」

「……………」

岡崎は黙って耳を傾けている。

絵音は物静かに話し続ける桐生の横顔を見つめた。岡崎が聞いたのは自分のことではないはずで、それは桐生も良く分かっているだろう。先ほど絵音の無事を聞いて安堵したように見えたのも、奈津子と同時に倒れた絵音が無事だったということ、奈津子も似たようなものだと思ったからかもしれない。見知らぬ他人である自分の安否などより、自分の恋人の状況の方がずっと気になっているはずだ。——どうしてもそういう風に深読みをせずにはいられない自分に対して、絵音は知らず知らず苦笑を浮かべていた。

「それから」

桐生は変わらぬ声音で告げる。

「もう一人の被害者——吉原奈津子はまだ意識不明です」

「……………えっ？」

本来、家族でもない彼に、何故桐生は詳細な病状を告げるのか。伊吹は怪訝に思ったが、止めはしなかった。何か考えがあるのだろうから、泳がせておこう。彼がそう判断することすら、桐生は見通しているのかもしれないが。

岡崎が引きつったような声で聞き返す。

「それ……………どういう」

「言葉通りです」

「でも……………でも、彼女は!?!」

岡崎は絵音を指し示しながら身を乗り出す。その必死なさまに、伊吹は僅かに痛ましげに眉根を寄せたが、桐生は表情ひとつ変えな

かった。

「トリカブトの摂取量が異なっていたのです」

桐生はあくまで静かに語り掛ける。

「ですが、生命の危険な状態というわけではありません」

「でも意識不明って……」

「明朝までには目を覚ます確率が高いと思いますよ」

「……………」

岡崎は深くため息をついた。心から安堵したのだろう、冷房が効いているにも関わらず、じつとりと汗ばんだ額を拭う。

「……それで」

伊吹が口を開く。

「君の話を聞かせてもらいたいんだが」

「――鞆の中には」

突然、それまで黙っていた草摩が言葉を発した。伊吹は気圧されたように口を閉じる。

絵音は草摩を見遣る。その瞳は、不思議な色をしていた。夕焼けの混じった、レモンティーのような色。光源を乱反射する煌めきは、揺らめく炎を思わせた。

誰も口を開かない内に、草摩は言葉を続けた。

「持ってきた覚えのないペットボトルがあるのでは？」

「え?!」

伊吹は驚いて岡崎の顔を見る。彼は啞然と口を開けていた。横目で伺った桐生は平静な様子、絵音も目を見開いてはいるが、特に驚愕した様子はない。むしろ、どこことなく納得しているかのような……。

——これじゃどっちがプロだか分からん。伊吹はため息をかみ殺しながら、茫然としている岡崎に向き直った。

「それは本当ですか？」

「……ああ、いや、はい」

岡崎は困惑しながらも鞆を開けた。

「実はそのことでここに来たんです——勿論奈津子のことにも気になつていたんですけど」

「ほう」

「でもペットボトルだけじゃなくて……」

岡崎は鞆の中から一枚の便箋を取り出した。

「手紙も、あつて」

「手紙？」

伊吹が聞き返す。岡崎は頷いた。

「誰から、ですか？」

「冴木」

答えたのは岡崎ではなかった。草摩である。

「冴木百合子——そうですね？」

「……は、はい」

同年代のはずの草摩に、岡崎は圧倒されていた。むしろ実際、草摩は岡崎の後輩で年下である。だが今の彼にはそんな風に感じさせる要素は何もなかった。

「……………」

桐生は僅かに眼鏡の奥の目を細める。——ますます一騎さんに似てきたな。絵音はただじっと、草摩を見つめている。大きな黒い瞳。そこに映る色に見覚えがあるような気がして、桐生は唇を引き結んだ。

——そうか。不意に気がつく。——彼女は、どこか……。

「僕に、似てるんだ」

桐生の声は誰の耳にも届かなかった。

11

カンファレンスルームに岡崎が入ってきた時、草摩はすぐに彼の姿勢が不自然であることに気付いた。大きな肩掛け鞆を自分の体の

前に回し、何か貴重品でも扱うように両手で抱えていたからである。あそこに何かが入っている。そう思った。そして、それこそが彼がここにきた理由だと。

確かに伊吹は「吉原奈津子の交際相手から話を聞く」とは言っていた。だが「話を聞く」と言ってすぐにここにやってきたということとは、伊吹が指示を出すまでもなかったということだろう。それでは何故彼はここに來たのか。

——吉原奈津子のことが心配だったから？　確かにそれもあるかもしれない。だがそれだけではないだろう。そんな気がしていた。彼の鞆に何かが入っているとしたら、それは今回の事件に関わるものであるはずだ。だとすれば、それは何か——。

桐生の淡々とした声が耳に入っていた。だがその言葉は全く解釈されることなく、ただ音としてののみ響いては消えていく。

舞台上で衆人環視の中崩れ落ちた冴木百合子。

二人きりの密室の中で倒れた雪村絵音。

その後を追うように昏倒した吉原奈津子。

一人は死に、

一人はすぐに快復し、

一人は未だ意識不明だ。

そして——残された二本のペットボトル。

「私は、実験台だったのね」

絵音の声が聞こえる。

——もしかして。

草摩の脳裏に閃光が走る。

——もしかして……。

「だからこそ、私は私が信じたいものを信じようと思うの」

やはり……、

そこに全ての答えはあったのだ。

草摩はゆっくりと口を開く。

「鞆の中には」

静寂が部屋を支配する。

「持ってきた覚えのないペットボトルがあるのでは？」

それはこの長い舞台の、幕切れの始まりだった。

12

ピッ……ピッ……。

規則正しい心電図の音。

彼女はただ静かに呼吸を繰り返していた。瞼は固く閉ざされている。一時は白く透けるようだった肌の色も、今は大分血色を取り戻していた。

「大丈夫」

寝台の側に立っていた医師が呟き、小さく微笑む。

「何があったのかは知らないが……死ななくて良かったね」  
優しい声。

「若いんだ。何も死ぬことはない」

つぶやきを残し、病室を出て行く。

しばらくの後――、彼女の白い頬に涙が一筋伝った。

## 第四楽章 Presto

1

「それ、見せてくれ」

伊吹はポケットの中から薄い白手袋を取り出すと手早く嵌め、岡崎から手紙を受け取った。

便箋は白で、何の飾り気もない。横書きでしたためられた文字は几帳面に整っている。彼は急いで目を通した。

「くだらないことに巻き込まれてしまいましたね」

桐生は首をすくめる。

「まあ、そうだな」

草摩は惘然として頷いた。岡崎が険しい形相で振り向く。

「それ、どういうことだよ。くだらないって」

「どういふことも、こういうことも」

草摩は投げやりに答えた。そこには先輩に対する尊敬の色など欠片もない。

「思ったとおりを言ったままでですけど」

「人が一人死んでるんだぞ？ それに、奈津子だってまだ意識が戻っていないのに……」

「知っていますよ、そんなこと」

草摩はぴしゃりとはねつけるように遮った。絵音は驚いたように彼の横顔を眺め、やがて息を呑む。彼の眼には紛れもない怒気の色があった。噴火寸前の火口のような輝き。美しくはあるけれど、危険な色。

「だから何だっていうんですか」

「な……」

岡崎は虚しく口を開閉させる。

「こんな馬鹿げた自殺、俺は知りません」



吐き棄てるような声音。そこに滲むのは嫌悪だった。

## 2

伊吹が顔をあげ、部屋に満ちる気まずい空気に気付いて眉を顰めた。岡崎は唇を噛んで草摩を睨みつけているし、草摩はそんな視線をもものともせず不機嫌な顔でそっぽを向いている。絵音は複雑な表情を浮かべて草摩を見守っていた。

「どうかしたのか？」

一人穏やかな微笑を崩さない桐生に尋ねてみるが、

「いや、草摩君がよほど腹に据えかねているようですね」

答えになっているような、なっていないような言葉が返ってきた。

「腹に……？　どういうことです？」

「それよりも、手紙。お読みになったんでしょう？」

伊吹は頷いた。

「鑑定にも回すが、これが冴木百合子本人のものだとすると……」

——吉原奈津子の立場は悪くなるな。伊吹はその続きを口中で呟く。

桐生は唐突に指を一本顔の前に立てた。左手の人差し指だった。

「その手紙に書いてあった内容。当ててもいいですか？」

「え？　……はあ、ご自由に」

一応部外者である彼らに証拠品を勝手に見せるわけにはいかないが、勝手に桐生が当てる分には構わないだろう。

桐生はわざとらしく少し考え込むふりをしてからふっと顔を上げた。

「『私は吉原奈津子に殺される』——」

薄い唇から漏れ出した言葉に、伊吹は動揺した。

「『いつの間にか私のお茶がすり替えられていたことに、さっき気付いた。もう飲んでしまったから遅いかもしれないけれど、一応貴

方に証拠品として託しておく。彼女に隠滅されるのを防ぐためにも』  
……とか、何とか？」

最後だけ妙に明るく言って桐生は言葉を切った。

「どうです？」

「……大まかに言うのと、そんなようなことですよ」

伊吹は何か大切なものを諦めたような表情で同意した。――何故当てることができたのか、何をどこまで分かっているのか、それを彼に問い詰める気力は既になかった。

「な、なんで……？」

代わりに岡崎が驚いている。無理もない、と伊吹は思った。だが、自分はもう驚かない。桐生千影とはそういう男だから。

何かを犠牲にして、

何かを得る。

何かを殺して、

何かを生かす。

その方法を、知っている男なのだから。

「さっき……」

絵音の声を久しぶりに聴いたような気がして、草摩は振り向いた。彼女の視線とがち合う。相変わらずの真っ直ぐな眼差しだった。

「自殺って、言っただけだ」

「ああ、うん」

「それ、正確じゃないと思うわ」

――あれ？

草摩は軽いデジャビュを感じた。彼女の黒い瞳。ぽっかりと開いた空洞を覗き込むとどこまでも落ちていって帰って来れなくなりそうなの、そんな淵。

「多分、」

ほとんど唇を動かさずに彼女は語る。

「殺人未遂。容疑者死亡だけど」

「そうかもしれない。でも……僕はやっぱり自殺だと思う」

「……ま、それは彼女でないと分かりませんね」

桐生が軽く口を挟む。伊吹が問い返した。

「彼女、とは？」

「……………」

桐生が振り向く。伊吹は彼の淵と、相對した。

「冴木百合子、ですよ」

### 3

カンファレンスルームの扉が開き、看護師が姿を見せた。

「吉原奈津子の意識が戻りました」

——ガタン、と岡崎が椅子を蹴立てて立ち上がるのを伊吹は制し、桐生に目配せした。

「様子を見てきていただけますか」

「はい」

視線で訴えかける岡崎に、

「君はここに居て」

「……………」

伊吹は無表情に告げた。岡崎は不審そうな視線を桐生に向ける。

——何で貴方だけ。そう言いたげだった。だが、そんな彼の表情など桐生は意に介さない。

「では、少し離れますね」

軽く草摩に手を振り、絵音に会釈して、桐生は部屋を出て行った。扉の閉まる音が、やけに大きく響く。

「……………」

部屋に落ちた沈黙を破ったのは伊吹だった。

「草摩君には分かっているのか。今回のことが一体何だったのか」

「分かっているのかどうか、僕には分かりません。ただ、客観的に見てどういう事象が起こり得たのか、その最も可能性の高いものを提示することはできません」

「ああ……それで構わない」

伊吹は椅子に腰を降ろした。――草摩はとてつもなく不機嫌だ。それは伊吹にも分かっている。そもそも草摩自身がそれを隠そうとしていない。だが、それがどういうことに由来するのかは全く分かっていなかった。

実のところ、第一報を受けてからまだ数時間しか経っていないのに、この疲労感ときたら。伊吹は深くため息をついた。

## 4

その人を死神だと思った。何故だかは分からないけれど。

吉原奈津子はぼうっと彼を見つめていた。とても綺麗な、背の高い男の人。彼女の父親よりはずっと若いけれど、恋人よりは年上だろう。長い指先が彼女の腕に刺さったままの点滴をチェックした。

「……先生」

ぽつりと呟く。

――死神ではない。彼は医者だ。

「わたし、友達に酷いことをした」

「許してもらえないかもしれない」

「わたし、彼を信じられなかった」

「もう駄目かもしれない」

「わたし、彼女を死なせてしまった」

「わたしのせいかもしれない」

「わたし……」

「吉原さん」

彼はやんわりと彼女を遮る。

「友達なんていくらでも取替えがききますよ」

「彼氏だって永遠のものじゃない。別れるかもしれない」

「死んでしまった人はもう戻らない。君が手を下したのでなければ  
気に病む必要なんてない」

「え……………」

奈津子はぼんやりと彼を見上げる。逆光になって彼の表情は良く  
見えない。ただひどく優しい顔をしている——ような気がした。  
ゆっくりと深呼吸をする。

「そう……………」

急に彼女は息を止めた。眼を見開き、彼を見つめる。

彼は微笑んでいる。ただ、優しく。

「君はそう言って欲しいんでしょう？ 君は悪くないって」

「……………」

奈津子はぎゅっと目を瞑った。それ以上聞きたくない。だが、彼  
は許してくれなかった。

「友達は君を許すかもしれない」

「彼は君を捨てないかもしれない」

「彼女のことで君が罪に問われることはない」

「……………」

眼を開いて彼の顔を見つめる。彼の表情は終始変わらなかった。

ただ、

穏やかに、

綺麗に、

笑っている。  
穢きたないものを全て押し隠して、  
笑っている。

「きっと彼は……君を許さないでしょうね」

——彼？ 奈津子には良く分からない。彼はそんな彼女を見つめながらも一言、呟いた。

「何より、貴方は貴方自身を許せるのかな……？」

## 5

「桐生が戻って来たら」

草摩は言う。

「俺は帰ります」

「帰る？」

聞き返す伊吹の方は見もせずに、

「伊吹さんは吉原さんの聴取に行くんでしょう？ 俺は行くわけにはいかないし、別に行きたくもないですから……」

「それ、どういう……」

声をあげる岡崎に草摩は鋭い一瞥を投げた。

「そもそも俺は警察関係者じゃないんです。いつまでもここに理由はない」

——ガン、と音を立てて椅子が吹き飛ぶ。岡崎の座っていたものだ。先ほどの草摩の態度に耐えかねたのだろう、草摩の襟元に手が伸びた。軽い音と共に、伊吹は落ち着き払ってそれを受け止める。

「そう熱くなるな。警察の前で暴力沙汰なんぞ、馬鹿げてるぞ」  
「一体……」

岡崎は赤くなった目元で伊吹を睨む。

「何だってこいつはこんなに偉そうにしているんですか!」

「え?」

「いや、偉そうにしているつもりはないけど……」

草摩は呟く。だが相変わらず眉は顰められたままだ。

絵音はため息をついた。――どう見ても草摩の態度はあまり誉められたものではない。何しろ、岡崎はまだ何も分かっていないのだから。

「草摩君、いい加減落ち着いたら? 私が怒っていないのに、貴方がそんなにカッカしてどうするの」

「……でも」

草摩は俯いた。母親に叱られた子供のような仕草に、思わず伊吹の口元が綻びる。

「俺はやっぱり許せない」

「許すかどうかは別の問題」

絵音はひどく穏やかな表情をしていた。

「生きていれば許せないことなんて沢山あるし、逆に私たちの許しを得なければ存在できないものなんて、この世界にはほとんどないのよ。そうでしょう?」

「……………」

――まるで桐生が言いそうな言葉だ。草摩は下唇を軽く噛んで黙る。

「えっと」

絵音はそんな草摩の様子には頓着せず、無然としている岡崎へと向き直った。拳を作り、指の背を頬に押し当てて。何かを考えているのだろう。

「あの……」

少し逡巡したかのように言葉を濁す。

「何?」

そっけなく聞き返す岡崎に、彼女はすまなさそうな表情を作った。  
「お名前、何だったかなって……」

伊吹は今日何度目かもわからない、大きなため息をついた。

6

身を固くしている奈津子に、桐生は問い掛けた。

「不安ですか？」

「え？」

奈津子が顔を上げる。桐生は微笑を浮かべて彼女を見つめていた。

「あなたのやったことは、殺人未遂かもしれない」

「ち、ちが」

「何が違うのです？」

桐生は優しい声で、しかし糾弾の手は緩めない。

「貴方はあのお茶に——冴木百合子からの手紙と共に貴方の鞆へと忍ばされていたお茶に、毒が入っているかもしれないと知っていた。それにも関わらず、貴方は」

桐生は言葉を切って奈津子の様子を観察する。白いシートの上に置かれた手は固く握り締められ、小刻みに震えていた。

「違う……」

消え入りそうな声。桐生はそれを無視する。

「冴木百合子からの手紙はどこへ？」

「捨てました……トイレに、流して」

「なるほど」

桐生は頷く。

「証拠は隠滅、か」

「そんなつもりじゃ……!!」

桐生を睨む目は涙をにじませていた。——しかし、

「では、どんな意味があるというのですか？」

そんなことに彼は頓着しない。その頬を彩る笑みを深めただけだ。  
「殺人事件の被害者かもしれない人の遺した手紙を警察にも見せず



に捨て、託された証拠品をも……」

「遊斗が」

奈津子の声音に嗚咽が混じる。

「彼が、あの人を殺すわけないもの……！」

「信じていた、と？」

「そうです！」

「それなのに」

桐生は言葉を紡ぎ続ける。

「貴方は試した」

びくん、と彼女の体が震える。

「彼女の言ったとおり、本当に毒が入っているのかどうか」

畳み掛けるように桐生は言った。

「貴方を心配して来てくれた友人の命を使って、試したんですよ」

「わ、たし……わたしは……」

「貴方の彼がトリカブトを入れて、冴木百合子に飲ませたのかもしれないお茶を……貴方は友達に飲ませたんだ。実験台として」

「違う……！」

奈津子の声は悲鳴に近かった。ベッドに横たえたままの体を深く折り曲げる。白いベッドカバーの上に涙が点々と落ちた。

——誰か助けて。

奈津子は心の中で泣き叫ぶ。

——遊斗、助けて。

「貴方は卑怯だ」

桐生は両手を白衣のポケットに突っ込み、あくまで穏やかな口調で彼女に語りかけた。しかし、もし彼女が顔を上げて彼の表情を見ていたなら——その眼差しの冷たさに慄然としていたことだろう。

「貴方は自分の恋人を信用しきれなかった」

奈津子は掌で耳を塞ぐ。これ以上聞きたくない。

出て行って欲しい。

この男に。

今すぐ。

ここから。

いなくなってしまう方がいい。

「けれど貴方は彼に面と向かって問い詰めることも、かといって警察に相談することも、どちらもできなかった」

桐生は言葉を切り、小さくうずくまっている奈津子を見下ろした。

「貴方は……心のどこかで疑っていたのでしょうか。彼を」

「違う！」

「だから、貴方は自分で試さなかった。友達を使っただけです」

「違う……！」

「警察に言わなかったのは、自分の恋人が犯罪者になるのが嫌だったから」

「違います！」

「友達で試してみて、何も起こらなければそれでいい。安心できる。もし何かが起こったら……元々貴方はどうするつもりだったのです？」

「……………」

「現実」

桐生は彼女から視線を外し、窓の外を眺める。夏の強い日差しは既に和らいでいた。

「絵音さんは倒れた」

「……………」

「貴方の中で、岡崎遊斗に対する容疑は固まった。貴方の選んだ行動は、非常に面白かったですよ」

桐生はくすくすと笑った。さらに、心底楽しそうに肩を揺らす。

「貴方は咄嗟に証拠を隠滅しようとして、自分で残りのお茶を飲ん

でしまいました」

$$\vdots$$

「焦っていたのでしょうか？ それとも……彼に対する抗議のつもりだった？ むしろ——倒れている友人を目の前にして、自分が疑われるのが怖かっただけかもしれません」

奈津子は既に声もない。桐生は不意に言葉を切り、身を翻した。

「そういえば、もうすぐご両親がいらっしゃるとのことですよ」

それを聞いた彼女の頬にかすかに血色が戻る。

「それから」

振り向きもせずに桐生は背中であげた。

「警察の方が……お話を聞きたがっています」

「――うゝ……」

再び彼女の体が震え始める。

「明日になってからかもしれないけど……その辺りは主治医の判断ですね」

「.....」

「それでは」

扉の開閉する音と、遠ざかる靴音。奈津子は背中からベッドに倒れこんだ。

——貴方は卑怯だ。彼の低い声が耳の奥で鳴り響く。

貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ  
貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ  
貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ  
貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ貴方は卑怯だ

«...»

奈津子はただひたすらに涙を流した。そうしていれば、少し楽になるような気がする。誰かに許してもらえないのではないかと――しかし、それは馬鹿げた期待だった。

「……うつ……」

床に倒れた絵音の姿。

「うつ……」

——貴方は試した。

「助けて……っ」

恋人の名前を呼ぼうとした喉が引き攣れる。

——貴方は疑っていた。

「ああ……」

奈津子は目を瞑った。

もう、どこにも逃げられない。

7

「とりあえず、だ」

気を取り直した伊吹が口を開いた。

「現状を把握したい。草摩君」

少々表情を和らげた彼に向き直り、

「君の考えを聞かせて欲しい」

「だから」

岡崎が苛立ったように声を荒げた。

「どうしてこいつを特別扱いしているんですか」

「………」

伊吹は少し黙り、やがて口を開いた。

「私が、彼の意見を聞きたいと思うからだ」

「何故です？」

「悪いかね？」

「……別に」

反問して黙らせる。だが、実のところ伊吹は岡崎の言うのももつともだと思っていた。確かに、傍目に見れば彼が草摩を特別視して

いるのは明らかだろう。

その場にいるもう一人の人物、雪村絵音を横目で見遣る。――そういうえば、彼女はそんなことを気にも留めていないようだが……。

「意見と言われても」

草摩は目を瞬かせた。

「何か、不明な点が？」

「……うん、まあ色々」

伊吹は一瞬絶句してから答えた。――今更こんなことで驚いていてはいけない。

「私も幾つかあるわ」

絵音が軽く手を挙げた。まるで授業中に挙手している学生のようにだ。

「……分かりました」

草摩は少し微笑む。

「じゃあ時系列を追って、簡単にお話します。疑問点があれば随時どうぞ」

「……少し待ってくれ」

伊吹は胸ポケットの中から携帯電話を取り出し、部下の一人にコールした。吉原奈津子から事情聴取できるかどうかを病院側と交渉させるためだ。

早口で指示を飛ばしている彼を見ていた草摩は、自分の横顔に注がれている視線に気付いて振り向いた。絵音があっけらかんとした笑顔で微笑んでいる。

「もうすぐ帰れるわね」

「……そうだね」

草摩は肩をすくめた。

結局、奈津子は精神的に混乱が見られるということで聴取不能という結論だった。草摩は電話を切った伊吹からそう聞かされ、小さく頷いてみせる。

「そういえば、桐生さんはまだ彼女のところに……？」

絵音の疑問には伊吹が答えた。

「いや、いなかったそうだ」

ちらりと草摩を見遣る。

「居場所が気になるかね？」

「いえ」

草摩はあっさりとそう答えた。

「しばらくすれば戻ってくるでしょう。とりあえず話を始めてしまいましょうか」

「……………」

岡崎が横目でにらみつけているが、草摩は気に留めていない。

草摩は伊吹が椅子に座りなおすのを待って、口を開いた。

「ではまず、冴木百合子の件についてです」

「ああ」

「結論から言うと、あれは自殺でしょう」

「何だって……？」

岡崎が呟く。

「百合子が、自殺……？ そんな、ばかな……」

「一つ、確認しておきたいことがあります」

草摩が岡崎を見つめた。

「貴方は、彼女とかつて付き合っていたことがありますよね？」

「……………」

岡崎は警戒した様子で彼を見返す。

「誰に聞いた？」

「吉原奈津子さんにです」

答えたのは絵音だった。

「今日、冴木百合子が倒れた後……彼女はその話をしてくれたんで

す」

「……………」

「否定しますか？ それとも肯定しますか？」

草摩に追求され、岡崎は苦しげに口をゆがめた。

「ああ、そうだ。半年くらい前まで……確かに付き合っていたよ」

「プライヴァシーに関わることをお尋ねしてすみません」

草摩はそう言うが、たいして悪いとも思っていないさそうに見える。絵音はおかしくなって口元を緩めた。——この人は本当に変わっている。さっきまでは不機嫌そうにしかめっ面をしていたのに、今はただ冷静に落ち着いた表情を見せていて、一体どこに切り替えスイッチがついているのだろうかと思議だった。

彼は淡々と柔らかな声で話していく。成人男性にしては高いトーンだが、それは彼女の耳に心地よく馴染んだ。

「何故彼女が自殺をしようと思ったのか、その動機は分かりませんし……正直、興味ありません。ただ、彼女の目的は明確です」

「目的？」

「ええ」

草摩は一瞬口を閉ざして岡崎をじっと見つめた。彼は落ち着かない様子で草摩を見つめ返す。

「彼女は……復讐がしたかったのでしょうか。もっと簡単に言うと、嫌がらせ……」

「嫌がらせ？」

伊吹は呆れたように口をぽかんと開けた。

「それは……彼、岡崎君に対してかい？ それとも」

「両方でしょうね」

草摩の表情に一瞬だけ嫌悪の色が滲んだ。だが、それはすぐに融けて消えてしまう。

「とにかく——彼女はトリカブト入りのお茶を用意した。どこから入手したのかは分かりませんが、まあそれは難しいことじゃない。トリカブトはその辺に結構自生しているそうですね。主に山間部

らしいですが」

「あ」

岡崎が呟いた。

「そうだ……確か、彼女の部屋には」

「鉢植えでもありましたか？」

草摩が間髪入れずに尋ねる。岡崎は茫然としたまま頷く。その脳裏にある日の会話が甦った。

——何のために、こんな危険な花……。

——そうかしら。

——そうだろう。

——本当に危険なのは、人間。トリカブトを毒物として使う、人間が危険なのよ。

「まあ、入手経路はともかくですね。彼女はそれを入れたペットボトルのお茶を、少なくとも二本は作ったはずです」

「二本……というと」

伊吹は思わず右手の指を二本立てた。

「吉原奈津子の持っていたものと、岡崎君が所持していたもの……」

「そういうことです。彼女自身がどういう手段で服毒したのかは分かりませんが……それは大した問題ではない」

「……………」

「彼女が本当にやりたかったのは、嫌がらせでも何でもなかったのかもしれないな」

草摩はぼつりと呟いた。

「ただ——彼女は試したかっただけなのかも……」

「試すって、何をだい？」

伊吹が尋ねる。

草摩は小さく微笑んだ。だがそれはどちらかというと投げやりな——寂しそうな笑顔だった。



「吉原奈津子と、岡崎遊斗の絆。信頼関係……ともいえるかな……言葉にすると陳腐になってしまいますけれど」

岡崎がかすかに反応した。唇を噛み締め、拳をぎゅっと握り締める。

絵音はそんな彼を横目で眺め、ため息をついた。草摩は再び表情を消し、言葉を続ける。

「冴木百合子は隙を見て二人の荷物の中にペットボトルと、手紙を忍ばせた。いつそんなことが可能だったのかは分かりませんが……その辺りはもう少し証言を集めないことにはね。ただ」

草摩は一瞬口を切った。軽く唇を舌で舐める。喉が渴いたのかしら……絵音はぼんやりとそんなことを思った。

「直前のリハーサル中に少し抜けて——お手洗いだとか何とか理由をつけて、楽屋に戻ることは可能だったでしょう。そうすれば二人に気付かれずに仕込めたかもしれない」

「確かに」

岡崎はうなずいた。

「そんなことがあったような気がする——そう」

思い出したのか、彼は顔を上げた。

「最後のリハーサルが終わった後、ホールの横でばったり彼女に会ったんだ。そこで話をした……」

「何の話ですか？」

「……………」

岡崎は決まり悪そうな顔をするが、隠し立てをするつもりはない様子だった。絵音の方に視線を向ける。

「奈津子が君に相談したのって、百合子のことだったんだよね？」

「え？ ……ええ、まあ」

絵音は不意をつかれて慌てたようにそう答えた。

「彼女と別れて大分経つけど……ずっと接触は絶えてなかった。おかしい、って思われるだろうし、俺もそう思ってた。奈津子はそれで大分悩んでいた」

絵音は思わず彼を凝視した。

「貴方は知っていたんですか」

その言葉は、岡崎の表情を歪めさせるのには十分だったようだ。

「ああ……知っていたよ。彼女が俺に訴える前から気付いていた」

岡崎は絵音を見ない。まるでそこに奈津子がいるかのように、ただ目を逸らしている。

「分かっていたから、何度も言った。俺と君は別れたんだってね。

奈津子と付き合う前から、ずっと言って聞かせていた。でも……」

「一つ疑問なんですけど」

草摩が口を開いた。

「迷惑していたなら、どうしても着信拒否するなり、メールも受信拒否するなりしなかったんですか？ それに、呼び出されたって無視すれば良かったでしょう」

「……それは」

「できなかった？」

「そうだ」

苦々しい声だった。草摩は心底解せない、という顔をする。

「それは、百合子さんの気持ちを慮って？」

「そうかもしれない。別に絶交しなくても良いと思ったんだ。別に、俺だって彼女を心底嫌いになったわけじゃない。以前みたいに仲良くできれば、それが一番いいなって……」

「なるほど」

絵音がため息をつきながら呟いた。

「そりゃあ、奈津子も悩む訳だわ」

その口調はつつけんどんで、心底あきれ果てたといった様子だった。

「……………」

岡崎は黙っている。

絵音は身を乗り出すようにして岡崎を見つめた。

「貴方にとって、本当に大切だったのは誰なんですか？」

「……………」

「確かに貴方は百合子さんを傷つけなかったかもしれない。でも、その影で奈津子は泣いていたんですよ」

「……埋め合わせは、してたつもりだ」

「埋め合わせ？ 人の心の傷を、どうやったら埋め合わせることができるんです？」

絵音の口調は穏やかで、表情は優しい。だが瞳は見開かれていて、今は瞬きすらしていないようだった。

「貴方は、百合子さんが怖かったんでしょう」

「な、」

「違う」

絵音はさらに言葉を重ねた。

「百合子さんによって貴方が傷つくのが怖かったんだわ」

「君は、一体——」

岡崎は顔を怒りに染めた。絵音はさらに言い募ろうとするが、それを止めたのは草摩だった。

「彼だけを責めるのは不公平だよ」

絵音ははっとしたように息を呑む。その一瞬の表情がとても生々しくて、綺麗だと草摩は思った。

——人を信じることは難しい。だけど……。

絵音が口をつぐんだのを見届けてから、草摩は岡崎に向き直る。

「奈津子さんも、貴方と同じでしたからね」

——結局は信じてしまう。僕らは何度でも、同じ失敗を繰り返す。

人を好きになって、

嫌いになって、

信じられなくなって。

だけど、いつか気づくんだ。

結局は全部、自分の中に原因があるんじゃないかって。

そう、

いつまでたっても鏡の前を動けない道化師みたいなものなんだって。

「絵音さんが倒れた原因は吉原奈津子であり、その後の彼女の行動はいわば――」

草摩は意識的に、その言葉を選んだ。

「突発的な自殺未遂なのです」

9

夜風がとても心地良い。

桐生ははためく白衣の襟で頬をなぶられながら、ぼんやりと東を眺めやっていた。一週間後には、あの山の年中行事である野焼きが皓々と空を照らすだろう。だが、今はただ黒々と夕闇の中に山が鎮座しているのみである。

「……………」

桐生は目を細めた。今頃草摩は伊吹に請われるまま、今回の事件の説明をしているのだろう。馬鹿馬鹿しい茶番。まるでただの喜劇。

誰もが誰をも信じていなかった。

誰もが誰かに裏切られていた。

むしろ、本当に誰かを信じていたのは……。

「こんばんは」

澄んだ声がして、桐生は振り向いた。

そこには長い黒髪の、一人の女性が立っていた。黒いスカートが風にはためいている。

桐生はかすかに息を吞む。穏やかに微笑むその顔には、見覚えがあった。あの時、ロビーの自動販売機の横で出会った――そして舞

台の上で倒れていた。同じ顔。

「そう、そうでしたか」

桐生はくすくすと笑い出す。

「まさか、貴方たちが入れ替わっていたとはね」

彼は病院の屋上にはりめぐらされた金網にもたれかかり、口元を押さえて笑い転げた。

「冴木百合子さん？」

「いいえ」

彼女は穏やかに微笑んだ。

「私はもう、百合子ではありません」

「では、お名前を教えてくださいませんか？」

彼女は少しだけ目を伏せ、そして真っ直ぐに桐生を見つめた。

綺麗な女性だと思った。少女めいた幼さと、どこか陰のある妖艶な微笑。そのちぐはぐさが独特の魅力となっている。

「冴木葉子（ようこ）」

彼女ははっきりとそう名乗った。

## 10

「自殺？」

「ええ、そうです」

草摩は聞き返す岡崎に落ち着いて答えた。

「どうして……どうして奈津子が自殺なんて!!」

つかみ掛からんばかりの勢いで言い募る彼に、伊吹は軽く手を差し伸べて止める。

「続けてくれ」

草摩を促す。彼は軽く頷いた。

「彼女は鞆の中に冴木百合子の入れたお茶と手紙を発見した。勿論これは冴木百合子が倒れた後のことです。手紙を見た彼女はどう思

ったか――」

「そうか」

伊吹は呟く。

「彼女に渡された手紙にはちょうど、岡崎君のものと逆のことが書いてあったわけだ」

「え？」

遊斗はぼかんと口を開けた。草摩は頷く。

「そう。彼女の読んだ手紙には、『私は岡崎遊斗に殺される。証拠品がこれだ』とあったはず」

「そ、そんな馬鹿な」

「手紙はどこから見つかっていないので、もしかしたら吉原奈津子が処分してしまったのかもしれませんがね」

草摩は淡々と言葉を継ぐ。

「その後の行動から見て、おそらく間違いはないでしょう」

「……そうか、なるほど」

伊吹が納得したように何度か首を縦に振り、やがて絵音に目を留めた。

「ということは……」

絵音はその言葉の先を予想したようににっこりと微笑む。

「そうですね」

「……………」

伊吹が口を噤むのに代わり、絵音が口を開いた。

「奈津子は私にそのお茶を飲ませてみたのです。冴木百合子の書き残したことが、本当かどうかを知るために」

「……………」

岡崎の顔から血の気が引いた。

「そんな……そんなことを……奈津子が……？」

草摩が口の端だけを歪めて笑みのようなものを形作る。

「そう。絵音さんが倒れた理由はそれですね」

「……………」

「その場にお茶が二本あったのもそういうわけです。一本はおそらく彼女が自宅から持ってきていたもの。一本は冴木百合子が忍ばせたもの」

「彼女は私が倒れた後、どうしたのかしら？」

絵音はその先を促すように草摩に尋ねた。草摩はうなだれている岡崎をちらりと見遣った。

「彼女の中で自分の恋人に対する疑いは決定的なものとなった。彼女は咄嗟に――」

「お茶をあおったのかね。トリカブト入りの」

驚きと共に発せられた伊吹の言葉に、草摩は頷いた。

「おそらく、目の前で絵音さんが倒れて動転したのでしょうね。その場に自分しかいなければ自分が疑われる。事情を話せば恋人に殺人容疑がかかる。そう考えて、彼女は――」

「……それで」

岡崎が呟いた。

「自殺未遂だと言ったのか」

「そうです」

「そう……か……」

「あの場に零れていたお茶は？」

伊吹が尋ねる。草摩は軽く首をすくめた。

「いくらなんでも、咄嗟に全部飲みきるのは無理だったのでしょう。絵音さんが倒れた時に叫んでしまっていたから、誰か人が駆けつけるのは時間の問題ですし、すぐに駆けつけた俺たちの足音も聞こえたでしょう」

「そうだね」

「彼女としては、お茶の成分が分析されることを避けたかったのでしょうかね……その辺は分かりませんが、飲みきれなかった分は何を思っただけにぶちまけた」

「……ふむ」

伊吹は軽く顎をつまんだ。彼女がそういう行動をとる可能性は、

十分考えられ得るだろう。

手の中に残った、友人を昏倒させたお茶。誰にも知られるわけにはいかない。この場に残すわけにもいかない――。

飲み干せば自分も倒れてしまうわけで、結局のところ稚拙な考えではあったが、咄嗟の時に思いつく行動などたかが知れている。追いつめられると何をしでかすか分からないのが人間。それは、彼の警察官としての経験に基づいた実感だった。

「俺が」

ぽつりと岡崎が呟いた。

「きっぱりと百合子をはねつけていれば良かったのか。着拒でもして、絶交していれば……」

「さあ」

草摩はそっけなく答えた。

「そうしていれば、少なくとも今あなたが味わっているような感情は、知らなくて済んだかもしれないですけど」

「……………」

「けれど」

絵音が付け足した。

「きつとそこには別の痛みも生まれたはず」

「……………」

岡崎が顔を上げる。憔悴しきった表情をしていた。

――根は優しい男なのだろう、と絵音は思う。優しさは時として他人ではなく、自分を守るための鎧となる。人を傷付けないことで人からも傷付けられまいとするための、鎧。しかし、それはいつか破綻を来すのだ――。

「誰も傷付けないことなどできない。だって貴方は二人の女性と同時に付き合うことはできないのだから。そんなつもりはなかったのでしょうか？」

「ああ、もちろんだ」

岡崎はきっぱりと言った。



「それに、俺は百合子とはもう無理だと思っていたし」

「それなら」

絵音はゆっくりと言う。

「貴方は百合子さんに憎まれて、恨まれて、それでもいい。それくらい覚悟が必要だったのよ」

「……………」

岡崎はうな垂れた。

「ああ……そう、だな……」

声がかくもっている。泣いているんだろうな、と草摩は思った。無駄だ。こんな時に泣いたって無駄なんだ。下らない。草摩は何故か苛立ちを抑えられなかった。何故だか分からない。だが、何か―――何かが引つ掛かっている。何か無理をしている。どこかに齟齬を感じる―――。

電子音が響き、電話を受けた伊吹が部屋を出ていく。扉が閉まる音と同時に、

「……偶然、過ぎる」

ぽつりと呟いたのは絵音だった。

「そうじゃない？」

「……………」

草摩は驚いて彼女を見つめる。まるで彼と同じことを考えていたようなタイミングだった。事実、そうなのかもしれない。

「冴木百合子の行動。あまりにもうまく行き過ぎている。誰もいないうちに、本人たちにも気付かれないようにお茶と手紙を入れるなんてこと、できるのかしら」

絵音は起伏のない声で何かを読み上げるかのように語った。

「できれば本番直前に仕込みたいところでしょうけれど、それを誰にも気付かれずにできる保証なんてなかったはず。全体的に人の心理を突くのは巧みかもしれないけれど、肝心の方法論がめちゃくちゃで行き当たりばったり。こんなに上手くいったのも、まるで奇跡のようでしかない。もし失敗すれば本人は無駄死になのに、そんな

僅かな可能性に掛けて実行したのかしら？」

「……………」

草摩は黙って彼女の言葉を聞いた。

——あり得なくはないと思う。

脳裏に浮かんだのはかつて自分を殺そうとした叔父の歪んだ笑顔だった。けれど……冴木百合子と叔父が似通った思考を持つかどうかなど分からない。

確かに、指摘された部分については彼自身もしっくりきていなかった。それ以外の説明をしようがないから、そう結論付けただけで、彼が手にしていない他の事実があれば真実はその形を大きく変えるだろう。——その程度のことなのだ。真実なんて。

「草摩君？」

声を掛けられて草摩は顔を上げた。絵音が顔を覗き込んでいる。思いのほか近いところに、彼女の瞳があった。

「な、何？」

声が上がったのを、慌てて咳払いで誤魔化する。

「伊吹さん、何処に行ってしまったのかしら。私、母を待たせているから……」

「そうだね。長電話にならないといいけど」

「そうね」

絵音はにっこりと微笑んだ。その笑顔は、あまりにも自然で——。  
「絵音さんは」

思わず草摩は声を掛けていた。

「気にしてないの？ 今度のこと」

「何？ 友人に毒の実験台にされたこと？」

絵音はあっけらかんと聞き返す。草摩は思わず口ごもった。視界の端で、岡崎が心配げに絵音を見つめている。

「そうね、別に気にしてないわ」

絵音の顔から不意に笑みが消えた。

「そんなこと、たいしたことじゃないもの」

「……………」

草摩が言葉を失う。

「ちよっと、伊吹さん捜してくるわね。じゃあ」

絵音は表情に笑みを取り戻し、手をひらひらと振った。

「……うん」

草摩は彼女の背中を見送りながら、ぼんやりと言う。

——寂しい瞳だった。

凜とした佇まいと裏腹に、力を込めて触れれば壊れてしまいそうな脆さをも併せ持っている。

——けれど、触れたい。

草摩は己の手をぎゅっと握った。

そっと、触れてみたい。彼女の心の輪郭を撫でてみたい。慈しみたい。そう思った。

## 11

言葉のない時間が流れた。

冴木葉子、と名乗った彼女。桐生はただそれを見つめている。彼女は目を逸らすことなくまっすぐに桐生を見据えていた。唇には張り付いたような笑み。だが瞳は暗く澄みきって瞬きすらしない。

「……なるほど」

桐生はつぶやいてふっと息を抜いた。

「貴方は自殺などしていなかった。貴方が殺したのは」

「自殺？」

彼女は聞き返し、小さく噴き出した。

「私がどうして自殺しなければならぬというの？」

「……僕が言っているのは」

桐生は気を悪くした様子もなく、真面目な表情で続ける。

「今日起こった事象をただ見せられどのように解釈するかと問われ

た時、一体どのような返答がなされ得るかということですよ」

彼女は不意ににっこりと微笑んだ。その切り替えは絵音に似ているようで違う。もっと人工的な、意識的な匂いがした。

「面白い方ね」

「だからこそ」

桐生は少しだけ微笑む。

「貴方はここに來たのでしょうか？」

「……そうかもしれない」

「貴方がここにこうやって來なければ——僕は貴方が姉だか妹だか、つまり冴木百合子が冴木葉子に入れ替わっていることには気付かなかったはずですよ。自己顕示ですか？」

彼女は首をかしげてみせる。

「私、客席で葉子が倒れるところを見ていたの。そのとき飛び出したのが貴方だった」

「……………」

「客席の人間は誰が倒れたか知らないし、教えてももらえない。私は遅くなりそうだから迎えに來てもらうために実家に連絡していたのよ。途中で——親には警察から連絡が入ったようだったけれど」

彼女は口早に告げた。桐生はそれを遮るように、

「僕は」

ときつい調子で言う。

「貴方と話すことは何もありますよ」

「……聞きたいこともない？」

「人間は」

桐生は笑みを消した。

「貴方が思っているほど馬鹿ではありません」

「……………」

彼女はわずかに目を細めた。

「貴方がどうやってご自分の姉妹を陥れたのか、などということに何の興味もない。もしかしたら積極的に貴方に協力していたのか

もしれないし、それとも貴方に騙されてトリカブトを飲まされたのかもしれない。貴方と入れ替わる方法はいくらでもあるでしょう。皆を驚かせるために髪型をお揃いにしたっていいし、貴方はもしかして今カツラをかぶっているのかもしれない。舞台だって、風邪を引いて声が出ないと代役を頼むこともできる」

「パーフェクトね」

感心したように鼻息を漏らす彼女に、

「しかし——貴方はまだ、自分が殺したものの大きさに気付いていない」

桐生はゆっくりと言葉を紡いだ。

彼女は黙って彼を見つめていた。その口元は固く、一文字に引き結ばれている。

「貴方の計画は、確かに成功したのかもしれない。双子を使って自殺したように見せかけ、その隙に貴方を振った元恋人と、そして彼の現在の交際相手に罠を仕掛けた。そして」

桐生はやれやれ、というように首をすくめる。

「彼らはまんまとその計画にはまってしまった」

草摩のように怒りをあらわにするほど、自分は若くない。だが、草摩がどうやらほのかに好意を抱いているらしい女性——雪村絵音が巻き込まれたのは、桐生にとっても腹立たしいことではあった。

「貴方はただ、それを横目で観察していればよかっただけ。さぞかし面白かったことでしょう。……けれど」

桐生は何の表情も動かさない。

「貴方はもう、冴木百合子には戻れない」

「……………」

彼女の表情に変化はない。

「貴方は他人の、本来冴木葉子のものであった人生を生きていく以外に道はない」

桐生の声音には軽蔑の色が滲んでいた。

「貴方は一生下らない茶番を続けていくしかない」

彼女は静かに口を開いた。

「……それが？ 茶番ではない人生が、この世にあるとも思っていないのですか？」

彼女はやれやれ、期待はずれだ——とでもいうような、そんな表情で苦笑していた。

桐生はふう、と息をつく。

「それは本人の気持ち次第でしょう。茶番だと思っていれば茶番に見える。そう思わなければ」

「それはただ、事実が付いていないだけではいいのかしら？」

「……いいえ」

桐生の脳裏には若い二人の姿が浮かんでいた。七条草摩。そして、雪村絵音。あの二人はきつと気付いている。気付いていながら、彼らは——。

「そんな言い訳はただ逃げ道を作っているに過ぎないと、そう考えている人もいます」

「……………」

初めて彼女の顔色が変わった。桐生はそれを面白そうに眺める。彼女は己の失態に気付いたのか、表情を改めて無表情を保った。しかし、容赦なく彼は言葉を重ねる。

「貴方は、貴方の人生から逃げた。それだけですよ」

絵音は屋上から降りてくるエレベータの階数表示を、ぼうつと眺めていた。——ようやくこの、非日常的な事件から解放される。伊吹にも、もう帰って良いと言われた。帰ろう。母と共に、自分の家に。そう思っても何故か気は晴れない。

奈津子のことにも気にかかるが、もう彼女とは前と同じようには付き合えないだろう。絵音の感情的な問題ではない。ただ何となくそういうものなのだろうと思った。

たとえば退院した奈津子に謝罪されたとして、自分は彼女を許すことができるだろうかと考えてみる。——許すことは簡単だ。全てをなかったことにできる。だからこそ、自分はその安易な道を選ぶかもしれない。しかし、本当は起こってしまった後でなかったことにできることなど何もない。だからこそ、人は忘却に縋って生きている。「自分にとって」だけは、なかったことにできるように……。

やがてエレベータの扉が開いた。先客は、見覚えのある女性だった。コンサートホールで草摩と一緒に居た自分に声を掛けてきたあの人だ。十人に尋ねれば十人ともが、掛け値なしの美人だと言うだろう。だが、そのうち一人くらいは彼女の持つ、かすかに陰鬱な雰囲気敬遠するかもしれない。——いや、陰鬱というのは少し違う。何となく近寄りがたい。こいつは自分の手には負えないぞ、というような……。

女性は絵音の方を見向きもしないでデジタルの階数表示を睨みつけていた。先ほど会った時とは随分印象が違う。絵音の存在にも気付いていないのかもしれない。さりげなく様子をうかがっていると、小さな拳がほっそりした腰の横で固く握りしめられていた。

——何か嫌なことでもあったのかしら。

絵音は内心で呟き、しかしすぐに思い直す。

——これは、嫌なことがあったというよりも……。

何か圧倒的なものによって叩き潰されてしまった。抗うこともできなかった。そういった無力さと悔しさと、僅かな——自分でも認められないほどの諦めと。そういった感情がマール模様を描いて彼女の顔を白っぽく染めているような。——まあ、勘違いかもしれないけれど。

一階に着き、絵音は彼女よりも先に降りて足早に歩き出した。絵音が母の待つ待合室に近づいた時、そこから見知らぬ中年の女性が飛び出してきた。

「?!」

驚いて跳ね退く彼女には構わず、女性は駆けていく。続いて出てきた男性——おそらくは彼女の夫だろうが、彼が代わりのように絵音に会釈して、そしてまた歩みを早めた。絵音は振り向くことなく、歩き続ける。しかし——。

「葉子!!」

「ママ」

「探したんだよ、警察に聞いたら葉子は先に病院に行ったと聞いたから」

「パパ、ごめんなさい」

「そんなことより葉子、」

ママ、と呼ばれた女性の声が震える。

「百合子が……!」

絵音は驚愕し、振り返った。

号泣する母親と抱き合う娘。そしてそれを側で項垂れている父親。

——ゆりこ? まさか……。

ごくり、と喉を鳴らす。その音がやけに大きく響いたような気がして、絵音はびくりと体を震わせた。実際には小さな音だったのだ。誰の耳にも届くはずはない。そんなはずはないのに——。

「……………」

自分よりも背の低い母親を抱きしめていた娘——あの女性が、ふっと目を上げて絵音を見た。その目は無表情に凍り付いている。そ



こには家族を失った悲しみなど欠片もなかった。ただ、どうでもいいといった投げやりな色。こんなところには自分の大切なものはないとでもいうように、興味もなさそうに眇めた瞳。

母親は気付いていないのだろう、涙を流しながら、娘に語りかける。

「貴方もショックでしょう、ごめんね、私がこんなで……この世でたった二人の姉妹だったんですものね、……生まれたときからずっと一緒だったんだもの……生まれた日も、生まれた場所も……」

「無理しないで、ママ」

声だけはあくまで優しく。娘は立ち尽くす絵音をただ眺めている――まるで、彼女がどこまで知っているのかを試すように。

絵音はそれ以上見ていられなくなり、くるりと踵を返した。

――冴木百合子には双子の姉妹がいた。そしてきつと、彼女は……。

「そうか」

唇の中で小さく呟く。背中に感じる冷たい視線。彼女はそれから一刻も早く逃れたくて、母の待つ待合室に飛び込んだ。

13

伊吹の携帯電話にかかってきた用件は、冴木百合子の両親が到着したというものだった。彼は沈痛な面持ちでそれを告げる。草摩は頷いた。――もう、ここで話すことは何もない。

連れ立って扉を出たところで捜査員に先導されてきた三人の人物に出会った。冴木百合子の遺族だろう。実際のところはたまたま立ち会わせた部外者に過ぎない草摩は、彼らと目をあわさずにその場を離れようとした。伊吹が一步、前に出る。

「この度は誠に――」

「どうして娘は死んだんです！ どうして」  
半狂乱で食ってかかる母親をなだめながら、伊吹は草摩に目配せした。もう行け、ということなのだろう。草摩も頷き、歩みを再開する。

廊下を歩む草摩の耳に、聞き覚えのある声が飛び込んできた。

「岡崎さん、お久しぶり」

そういえば先ほど母親の後ろにひっそりと立っている人影があった。どこかで見たような――。

「あ、ああ」

口ごもりながら、岡崎が答えている。

「このようなところで会いたくはなかったわ」

「……………」

「でも、どうして姉は……」

「貴方の方が妹だったのですか」

「ええ。百合子が姉で、私が妹でした」

草摩は不意に歩みを止める。

――思い出した。彼女を一体どこで見たのか……。

「生まれた日は一緒でも、死ぬときは別なのですね……………」

――彼女は確か、あの時コンサートホールで。

「……………そうか」

草摩は小さく呟いた。これで全ての辻褄が合う。

――結局、全て彼女の手の内にあったわけだ……。

ぞっと身震いした草摩の前に見覚えのある長身が立ち塞がった。

「桐生……………」

見上げた彼の顔はどこか侮蔑の色に染まっていて、草摩はなぜか

ほっとする。やはり桐生も気付いていた……。

冴木百合子は、

双子の妹の冴木葉子を、

自分の身代わりに殺した。

自分がかつて捨てた恋人と、

その彼女との絆を確かめる、

ただそれだけのために。

それだけのために、

絵音は倒れた。

「……行きましょう」

桐生に促され、草摩は歩み出す。

——決して振り返らない。それが今の彼にできる精一杯のことだった。

## エピローグ

腹に響く低音とともに、夜空に弾け滲むきらめき。絵音はそれを目で追いながら、小さなため息をついた。

「どうかした？」

「ううん」

草摩の問いに、彼女は横に首を振る。

「ちょっとだけ、思い出してしまったの」

「……………」

それだけで、彼には彼女の脳裏に何が浮かんでいるのかがわかった。

黒髪の長い、大きいけれど切れ長の目。澄んだ細い声で、しかし彼女は――。

「済んだことね」

絵音はあっさりとそう言い、わずかに腰を草摩の方へとずらした。草摩は反射的に体を引こうとして、しかし思いとどまる。――何のためにこんな、夏の終わりの花火大会に誘ったのだから。

それでも、まだあの事件から一ヶ月も経っていないことも事実だった。

「そういえば」

絵音は言う。

「花火大会の日って月が目立たないのね。ちゃんと暦を調べているのかしら」

「そうだな」

草摩は頷く。

「言われてみれば……」

月を覆う花火というのはどうもイメージがわからないし、風情も半減するような気がする。

「そういう小さな気遣いって、素敵ね」

絵音は言って微笑んだ。風が吹けば彼女の髪が草摩にかかりそう  
な、そんな距離。

そして——風が吹いた。

「俺は」

草摩は絵音をじっと見つめた。

「やっぱり許せない」

「……………」

「吉原さんのことも、……あの人のことも」

「……なっちゃんはどうしているの？」

「とっくに退院しているらしいよ」

草摩は言った。

「新学期からはふつうに登校するだろうってさ」

「お咎めはなしだったのね」

絵音はそう言って微笑んだ。

「良かったわ」

「……………」

草摩はため息をついた。——きっとそう言うと思っていた。けれ  
ど……。

「俺が怒るのは——許さないのは」

草摩の表情を見て、絵音はす、と笑みを消した。

「諦めたくないからだ」

「……………」

「だから」

彼らの頭上で、花火が開く。

「絵音さんも——諦めないで欲しい」

「——何を、」

「わかるでしょ？」

「……………」

「ね？」

「……………それってもしかして」

絵音は少しだけ余裕を取り戻した表情で尋ねる。

「遠まわしな告白ってやつ？」

「そういうことを本人に向かって聞くなよ」

草摩はふくれっつらになって絵音を睨んだ。その表情がどこことなく仔犬に似ていて、絵音は嘖き出して笑う。

「あ、しかも笑う?!　ここで笑う?!」

そして、また。花火。

「ご、ごめんなさい」

絵音はわれに返って謝罪した。草摩は宵闇にまぎれてもはっきりと分かるほど顔を赤く染めていた。――可愛いなあ、と思う。きっと、自分は草摩のことなら好きになれるだろう。なれるからこそ…。

「私は臆病よ」

ぽつり、と絵音は言った。

「……………」

「人を信頼するのも、好きになるのも嫌い」

「……………」

「人に弱みを見せるのが大嫌い」

「うん」

「裏切られるのが嫌だから、心を預けない」

「うん」

草摩は頷く。

それでも、絵音はまだ諦めていない。草摩はそう信じていた。

「草摩君は、怖くないの？」

絵音は初めて、草摩から目を逸らした。それでも、草摩は彼女を見つめ続ける。

「怖いよ」

ぽつりと呟かれた答えに、絵音は意外そうに目を見開く。

「それでも――信じてしまうんだ。好きになっちゃうんだ」

草摩は言った。

「諦められないんだ」

夜空に咲く偽物の花が、ふたりを照らし出している。

「この世の中に綺麗なものが何にもないなんて、思えない」

「……………」

「俺は」

一際大きな輝きを残し、花火が終わる。

一瞬の静けさ。

「絵音さんと、一緒にいたいんだ」

「……………」

絵音が草摩を見て微笑む。しょうがないわね、というような表情。それでも、とても優しい笑顔だった。

「ありがとう」

草摩の手が絵音の指先を握る。夏なのにひんやりと冷たい彼女の指。わずかに汗ばんだ彼の手のひらには、それがひどく心地良かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7227z/>

---

煉獄恋歌

2011年12月24日01時02分発行